「起きろ」
肩を揺さぶられ、目を開ける。
視界を占めているのは地平線の彼方まで広がる無辺大の砂漠、じりじり高度を下げ始めた灼熱の太陽という、目を瞑る前とそれほど大差ない光景。砂を含んだ風がシャツの裾を音高くはためかせ、後方へと飛び去ってゆく。
砂漠の真ん中を走るジープの荷台に揺られていると気付いた僕は、次の瞬間口を開く。
「汚い手で触れないでくれたまえ」
最前まで僕の肩を揺さぶっていたのは、荷台に同乗していた若い看守だった。看守は一瞬ぽかんとした。間抜け面だ。こいつの知能指数は高くないだろう。馬鹿が伝染ると困るから、肩を揺すって手を振り落とす。僕は中指で眼鏡のブリッジを押し上げると、低能な看守を冷ややかに一瞥した。
「こ、この野郎……!」
馬鹿のごたぶんに漏れず、この看守は血の気が多い。腰に下げた警棒をひっ掴み、風切る唸りとともに僕の頭上へと振り上げる。衝撃。頬をしたたかに殴りつけられ、背後に手をつく。僕の頬を殴打した看守は、未だ怒りが冷めやらぬらしく浅く肩を上下させている。切れた唇を手の甲で拭い、目の端で看守を見る。自他ともに認める生意気な面が気に食わなかったのだろうか、看守の顔が醜悪に歪む。
「なんだその目は…看守様になんか文句でもあんのか⁉」
弛んだ頬肉を波打たせた看守が、唾をとばして咆哮する。堂に入った巻き舌で恫喝されても僕は動じない。硬度を増した針の視線で、煩わしげに看守を一瞥する。まったく、これじゃどちらが犯罪者かわからない。わざとらしくため息をつき、看守から目を逸らす。
「文句などない。強いていえば……ああ、唾が飛ぶからこれ以上口を開かないでくれないか。不愉快きわまりない」
至極当然のことを指摘したまでなのだが、僕の良識ある忠告は看守の逆鱗に触れたらしい。看守は満面を朱に染めるや、激昂して警棒を振り上げた。手垢の染みた警棒が鋭く風を切り、無防備な眉間へ振り下ろされる。
「そのへんにしておけ」
制止の声は運転席からだ。半身を捻り、剣呑な半眼で運転席を睨む看守。運転席でハンドルを握っていたのは、くわえ煙草の男。垢染みた作業着を羽織り、眠たげな目でハンドルを操作している。
「……なんでだよ」
看守は不満そうだ。運転手を睨む目が鋭さを増す。ハンドルに顎を乗せた運転手はおどけたように肩を竦めた。無精髭の散った顎を掻きながら、欠伸まじりに付け足す。
「お前さん知らねえのか。その小僧はＶＩＰだぜ。丁重に

扱わねえと上からお叱りを受ける」
「ＶＩＰだあ？」
運転手はハンドルを回しつつ、面倒くさそうに説明する。
「万一そいつの頭をぶん殴ってみろ。ＩＱ180の超高性能の頭脳がイカレちまったら、お前、どう責任とるつもりなんだよ？」
看守の顔色が豹変した。顔面蒼白になった看守が、磁石の両極が反発するように僕から距離をとる。彼も漸く気付いたのだろう、僕がただの「囚人」ではないということに。
不規則に跳ねる荷台の上、未舗装の砂利道を疾駆する一台のトラック。延延と砂丘が連なる無味乾燥な光景を眺めていると、時間の感覚が狂ってくる。

遠い昔、この砂漠地帯は東京の中心として都市の中枢機能を一手に担い、大いに栄えていた。世界有数の大都市として繁栄した首都・東京だが、二十一世紀初頭に起きた度重なる地震とそれに伴う地殻変動により様相は一変し、後には広大な砂漠が生まれた。
かつて東京のシンボルとして一億二千万の民に仰がれた東京タワーも半ばまで砂に埋もれ、無残に風化して久しい。砂漠と化した旧首都の周縁にサークル状に広がっているのは、低所得層のスラムである。スラムを構成する住民の大半は、不法滞在の外国人で占められる。出稼ぎ目的で日本に渡ってきた外国人とその子孫は、戸籍をもたない二世三世として今も増殖を続けている。
だから、隣に座る馬鹿がこう問い掛けてきた時も僕は特に反応を示さなかった。

「お前、日本人か？」
「……国籍は日本、戸籍上の両親も日本人だが」
隣で胡坐をかいていたのは、品のない馬面の少年。
護送中の退屈を紛らわすためか、唯一会話が成立しそうな僕に話題を振ったのだろう。僕を除く面子は、会話以前に意思の疎通さえ怪しいからだ。荷台の隅で膝を抱えているのは、がりがりに痩せ細った貧弱な少年。血の気の失せた唇から連綿と漏れているのは、陰にこもった不明瞭な呟き。意味不明な繰り言は自分の世界に閉じこもっている証拠であり、会話が可能な精神状態でないことは一目瞭然だ。
少年の対角線上で憮然と押し黙っているのは、先刻の看守だ。仏頂面で腕を組み、我関せずとむすっとしている。看守の顔色を上目遣いに探りつつ、馬面の少年が問いを重ねる。
「お前、純血種？」
「あまり好きではない呼び方だ」

辟易する。第一印象を裏切ることなく、この少年は頭が悪そうだ。予感が確信に変わるまで、０．５秒しか要さなかった。

「ついてるぜ、お仲間発見だ」

同類を発見した喜びに、少年の顔が輝く。少年はなれなれしく僕の肩を叩くと、立て板に水とまくし立てた。

「俺は石動ダイスケ。もちろん純血種の日本人だ。曽祖父の代まで遡れるぜ。しっかし奇遇だな、刑務所に向かうジープの上でいまやごく少数となったお仲間に巡り会えるなんてよ」

汚い手で触るなという言葉が喉元まで出かけるが、自制心を総動員して堪える。その代わり、肩口に乗った手をよそよしく払いのけ、機械的に口を開く。

「私語は厳禁だ」

「かてえこと言うなって」

ダイスケが怖じる気配は無い。それどころか、ますます調子に乗って続ける。

「で、お前、なにやったの？」

「……」

下世話な好奇心を露わにして、ダイスケが尋ねる。沈黙。

「……君はなにをしたんだ？」

問いに問いを返すのは核心をはぐらかす常套手段だ。僕の睨んだとおり、ダイスケは嬉々として語り始めた。

「強盗だよ。スラムの奴らを標的にしてたからアガリは大したことなかったけどな……これでもふたり殺ってるんだぜ、おれ」

殺人・強盗か。目新しくもない。僕の内心を見抜いたのだろうか、ダイスケが再び質問の矛先を向ける。

「で？　お前はなにやってとっつかまったんだ」

「『尊属殺人』」

喘ぐように口を開いた僕の語尾を奪ったのは、それまで隅で胡坐をかいていた看守だった。胸の前で腕を組んだ看守が、下劣な笑みを満面に湛え、僕とダイスケを交互に見比べる。

『尊属殺人』

その一言が与えた衝撃は、静かに大気中に浸透していった。固唾を呑んだように押し黙るダイスケ、隅で膝を抱えていた少年が鞭打たれたように蒼白の顔を起こす。ハンドルを握った中年男が、聴覚に全神経を集中させているのがわかる。乾いた風が顔面を叩き、ざらついた砂がシャツの内側へと忍び込む。襟に指をひっかけ、上下に揺する。

僕は小さく歎息した。

「……よくご存知ですね」

別に隠すつもりもなかったが、自発的に暴露することでも

ないだろう。くぐもった声で看守が笑う。卑屈な笑い声が風に乗じ、遥か後方へと飛び去ってゆく。
看守の笑い声にも特段反応を示すことなく、僕は常と変わらぬ無表情で虚空に目を馳せる。
「……マジかよ」
無防備な鼓膜を叩いたのは、狼狽しきったダイスケの声。最前まで一方的な親近感に満ち溢れていたその声が、真相を知った今では抑圧しがたい嫌悪に隈取られている。ダイスケの顔は醜くひきつっていた。不自然な角度につりあがった口角は笑顔未満の笑顔のようにぎごちなく、滑稽である。ダイスケは穴の開くほど僕を凝視していたが、やがて、嫌々するように首を振る。
「……イカレてやがるぜ、お前」
お前のような低能に指摘されなくてもわかっている。
胸に沸いてきた反発を、理性の力でねじ伏せる。ダイスケが言う通り、僕はイカレている。尊属殺人とは肉親に対する殺人罪……両親を殺した罪で刑務所送りとなった僕は他の囚人から異端視され、敬遠されるだろう。
事実、ダイスケはもう僕とは目もあわせようとしなかった。
うるさい蝿がいなくなってせいせいする。

溜飲をさげた僕は、ふと前方を仰ぐ。砂漠の真ん中に敷かれた砂利道を疾駆していた無骨なジープ、不規則に弾む荷台に揺られていた囚人三名と看守二名。その全員の視線が、遥か前方へと注がれる。

前方に隆起してきたのは、有刺鉄線で囲われた灰色の影。針で突いたような極小の点が次第に大きくなり、質量と体積を兼ねた巨大な建造物がその全貌を現す。
鋼の茨を備えた鉄線が地平に沿って延延と伸びている。起伏の激しい砂利道をトラックが進むにつれ、皆が無言になる。僕も例外ではなく、視界を圧する建造物の威容に声を失っていた。
コンクリート打ち放しの矩形の建物が数棟、有刺鉄線の向こう側に配置されている。それぞれの棟は渡り廊下でつながれており、さながら難攻不落の要塞か幾何学的な図面の迷路をおもわせた。
緩やかに傾斜した坂道を登る。タイヤが砂利を噛む耳障りな音。目の前に隆起したのは、不動の存在感を持つコンクリートの砦だ。夕闇の迫った空を率いた灰色の砦は、久遠の歳月を経て石化した巨大な怪物の亡骸にも見えた。
ここが東京プリズン。

そう遠くない将来、僕の墓場となる場所だ。

『囚人護送車№12到着、ゲートを開けてくれ』

片手でハンドルを操作しつつ、無線機へと口を近づける運転手。運転手の呼びかけに応じ、前方のゲートが開く。ゲートの横には監視塔があり、この仕事に就いて間もないだろう初々しい風情の看守が二名控えていた。

「今日到着予定の囚人三人だ。確認してくれ」

「わかりました」

窓から身を乗り出した運転手と若い看守が二言三言言葉を交わす。その間にもう一人の看守がジープを迂回し、荷台へと歩み寄る。荷台の隅で胡坐をかいていた年輩の看守がとってつけたように会釈し、若い看守も頭を下げる。

僕は一目見て両者の関係を理解した。同時になぜ僕らの監視目的で荷台に同乗していた看守がこれほどまでにぴりぴりしているのか、その理由も見当がついた。

雰囲気でなんとなくわかる。

ゲート横の監視塔に待機している看守は大学出のエリートで、荷台の看守はそうじゃないのだろう。

学歴の無い看守は囚人の護送という半日かけて砂漠を越えてくる退屈で過酷な任務に就かされ、大学出のエリートはゲート横の監視塔でジープの進行許可証を出すだけのラクな任務に就いている。ジープが到着するまでは実質的に自由時間であり、茶を呑みながら雑談に興じる優雅な身分の彼らとは対照的に、不規則に揺れる荷台の上で長時間灼熱の太陽に炙られていなければならないみじめな境遇の看守は、僕らに当り散らすことでフラストレーションを発散してるのだ。

などと思い巡らしていた僕のもとに、ザクザクと砂利を踏む靴音が接近してくる。ぱりっと糊の利いた制服を着用した若い看守が荷台の横で立ち止まり、互いに微妙な距離を隔てた囚人たちをしげしげと眺める。

「囚人№１２３１９、石動ダイスケ」

「……」

名を呼ばれてもダイスケは返事をしなかった。不貞腐れてそっぽを向いている。あまりにわかりやすく子供っぽい態度、幼稚な反発だ。おもわず苦笑しかけた僕の耳に平板な声が響く。

「囚人№１２３２０、リュウホウ」

「！」

リュウホウは過剰に反応した。びくっと顔を上げたリュウホウの顔は蒼白で、呼吸は喘息の発作が起きたように荒かった。虐待された小動物のように卑屈な目で自分を仰ぐリュウホウから視線を外し、リストの文面へと目を戻す看守。

「次、囚人№１２３２１……」
事務的にリストを繰っていた看守の手が止まり、感電したように眼球がせりだす。その表情は驚愕と好奇心に隈取られ、見開かれた目には理解不能といった畏怖の念があった。
「そうか、お前が……」
「お前が」なんだって？　続く言葉はため息にかき消されて聞こえなかった。放心状態の看守を我に返したのは持ち場に戻った同僚の声だった。
「確認した。前進を許可する」
もう一人の看守が大きく手を振りジープを誘導する。リストを抱いた看守が「確認作業終了、前進許可」と言い足し、狼狽したように道の脇に飛びのく。あと一秒遅れていればタイヤの下敷きになっていただろう。
ゆっくりとトラックが前進する。背後で鈍い音。振り返る。僕の眼に映ったのは嫌悪に歪んだ看守の顔と緩慢に閉ざされつつある鋼鉄製のゲート、その背景に広がる燃え滾る溶鉱炉の夕焼け。
『もう二度とでることはかなわない』
ホテルカリフォルニアの歌詞を思い出す。チェックアウトはできるが出ることは叶わない。古い洋楽のフレーズを反芻してると自然と自嘲の笑みが浮かぶ。僕がチェックアウトする予定日は何十年も先だが、その前に二度とこのホテルから出られなくなる可能性の方が高い。
なにせこのホテルは一度訪問した者は二度と出られないと評判の、万全の警備体制を誇る監獄なのだから。
絶望的な現実に直面しても、僕は外の世界に未練など感じなかった。
ただ一つ、例外を除いて。

タイヤが軋み、トラックが停まる。
不景気なエンジン音が止み、運転席のドアが開く。タラップを踏んで大地に降り立った運転手が大きく伸びをする。肩の凝りを揉み解している運転手の横、不機嫌な看守にどやされるがまま荷台から飛び下りるダイスケとリュウホウ。最後尾は僕だ。
リュウホウの背に続き、荷台から飛び下りる。着地。半日以上ジープの荷台に揺られてたせいか、磐石の安定感を備えた固い地面に違和感を覚える。軽い立ち眩みに襲われたが、看守に悟られるのはプライドが許さない。
無理を強いて足を運ぶ。看守を先頭にダイスケ、リュウホウ、僕と一列に歩いているとこじんまりしたビルが視界に現れる。周囲の建造物よりひとまわり小さいが、花崗岩の外壁は光沢のある白。小綺麗な外観をした低層のビルは官公庁に相応しく洗練されており、無骨なコンクリートの棟

に囲まれ異彩を放っていた。
看守に先導され正面の玄関へと続くスロープを登る。全員が登り終えたのを見計らい、看守が自動ドアの脇へと歩み寄る。自動ドアの脇に設置されていたのは正方形の液晶画面である。
液晶画面に掌を翳すと滑るように自動ドアが開く。掌紋照合を終えた看守が中へと進み、後列の僕らも無言で従う。
室内に一歩足を踏み入れた瞬間、ため息が漏れる。
空調設備が完全に行き届いた快適な空間、一点の染み汚れもない清潔な白い天井。鏡のように輝くタイル貼りの床には塵一つ落ちてない。
「ここでお別れだ」
顔をあげる。僕らを誘導してきた看守がせいせいしたといった口ぶりで言う。ぽかんとした囚人をエントランスホールに残して踵を返した看守は、去り際、意味ありげに僕らを振り返る。
「もう二度と会うこともねえと思うが、一つ忠告だ。とくにお前」
看守の人さし指が僕をさす。
「東京プリズンはただの刑務所じゃない。地獄だ」
一語一句噛み含めるように看守が言う。その目を漣のように掠めたのは暗い感情ー恐怖。看守は人さし指をおろすと、下劣な笑みを唇の端にたくわえて舐めるように囚人たちの顔を見回した。
「弱肉強食が東京プリズンの掟。殺られる前に殺るのが常識、犯られる前に犯るのが常識だ。そのことを肝に銘じとかないと一ヵ月後には首くくるはめになるぜ」
笑いながら自動ドアを抜けてゆく背をいまいましげに見送り、ダイスケが毒づく。
「……ザーメンくせえマスかき野郎が。あれでびびらせたつもりかよ」
僕は無言で看守の背を見送っていた。あれはただの脅迫ではない。看守の目を過ぎった感情の波は、決して演技などではない。
「石動ダイスケ、リュウホウ、鍵屋崎直」
張りのあるバリトンで名を呼ばれ、反射的に振り向く。廊下の向こうから律動的な歩調で歩いてきたのは、一分の隙なくスーツを着こんだ若い男だ。光沢のある黒髪をオールバックにした若々しい外見は三十代前半にしか見えないが、銀縁眼鏡の奥の怜悧な目はどこか老成した印象を抱かせる。男は品よく尖った顎を巡らし、僕らを歓迎した。
「東京プリズンにようこそ」
抑揚を欠いた、平板な声だった。感情の揺らぎというものを微塵も感じさせない声の主は、事務的な口調で付け足す。

「私は副所長の安田だ。これから君たちを所長室に案内する。ついてきたまえ」
安田の背に控えていた看守が二名、僕らの前後を塞ぐように陣を敷く。囚人の逃走を防ぐための処置だ。最後尾を歩きつつ周囲へと目を走らせる。白く磨かれた床と並行に伸びた白い天井、等間隔に設置された蛍光灯。病院の廊下を彷彿とさせる白で統一された光景が延延と続いている。
このビルの清掃夫は勤勉なようだな。
などと感心していると、列が停止した。先頭の安田へと目をやる。安田が対峙していたのは樫材の重厚なドアだ。安田が拳を掲げ、軽くノックする。
「入りたまえ」
扉越しに横柄な声が響いた。入室の許可を得た安田は機械的にノブを捻り、滑らかに開いたドアの内側へと進入した。安田に続き、ぞろぞろと入室した一同。最後に足を踏み入れた僕は、豪奢な内装に目を見張る。
毛足の長い絨毯が敷きつめられた広い部屋。
右手の壁には蔵書の詰まった本棚があり、左手には最高級の洋酒を並べた飴色の棚がしつらえられている。高価な調度品が配置された書斎の奥、紫檀のデスクにふんぞり返っているのは、恰幅のよい中年男だ。
革張りの椅子に肥満体を沈めたその男は、見覚えのある紺の制服に身を包んでいた。看守と同じ紺の制服だがずっと金がかかっているらしく、生地に高級感がある。
その右胸には、金の光沢を放つバッジが威圧的に輝いている。
所長の印だ。
「所長、今日到着予定の囚人三名を連れてきました」
「ご苦労」
安田の報告に頷き、デスクの前に並んだ囚人を一瞥する。
机上に手を伸ばし、バインダーに挟まれた資料を繰る。
「囚人No.１２３１９、石動ダイスケ」
けだるげに名を呼ばれ、ふてぶてしくダイスケが歩み出る。
所長は退屈そうに文面に目を馳せ、眠気をこらえて続ける。
「練馬区出身。家族構成両親と祖父母。現在16歳。罪状傷害十三件、強盗殺人二件。懲役二十年……次、囚人No.１２３２０、リュウホウ。豊島区アジア系スラム出身。家族構成両親。現在14歳。罪状放火八十件、懲役十六年」
刑期を読み上げるところで、僕の隣に突っ立っていた貧弱な少年ーリュウホウの肩がびくっと震えた。顔面蒼白のリュウホウから視線を転じ、正面を向く。所長は欠伸を噛み殺しながら続ける。
「次、囚人No.１２３２１、鍵屋崎直……ん？」
眠たげに垂れ下がっていた瞼の奥、精彩を欠いた半眼が俄

かに鋭さを増す。針を含んだ視線が冷徹に僕を一瞥し、所長が低く唸る。

「鍵屋崎……そうか、お前が例の！」

一瞬にして眠気が吹き飛んだのだろう。所長が上体を起こし、書類の記述とデスクの前に立った僕の顔とを見比べる。数瞬後。野太い息を吐き、所長が身を引く。眠気を払拭した所長は、表情を厳しく改めて告げる。

「鍵屋崎　直、世田谷区出身。家族構成両親と妹。現在15歳。罪状……両親に対する尊属殺人。懲役……」

所長が瞼を下ろす。嘆息。

「八十年」

ダイスケが驚く。リュウホウも驚く。僕は大して驚かなかった。心の表面は凪のように静まり返っており、直接刑期を告げられても波風一つ立たない。

八十年。所長の言葉を反芻し、我知らず暗い笑みを吐く。いかに尊属殺人といえど、懲役八十年は長すぎる。余程の理由が無い限り、刑期が五十年を越えることはない。

つまり、僕が両親を刺殺した裏には「余程の理由」が介在したわけだ。

所長は机上で手を組み、淘淘と語り出す。

「諸君らは罪を犯し、ここ東京プリズンに収監される運びと相成った。君らはここで更生を目指し、同じ境遇の仲間たちと共に自立を目的とした訓練を受けるだろう。その道程は決して平坦ではないが、君らの努力が実を結ぶ日はきっとくる。君らはまだ若い。将来に絶望するのは早すぎる。頑張ってくれたまえ」

熱っぽい口調でまくし立てる所長に、喉の奥から笑いがこみ上げてくる。一体この男は一日何度同じ演説を繰り返しているのだろう。所長の境遇に同情した僕の鼓膜を、安田の声が叩く。

「では、これから君たちをそれぞれの房に案内する。ついてきたまえ」

デスクの脇に端正な彫像のように控えていた安田が、颯爽と踵を返す。きびきびと室内を横切り、光沢のあるノブを捻る。安田の背に促され、踵を返した僕らを所長が呼び止める。

「ひとつ忠告だ」

空咳ひとつ、威儀を正した所長が眼光鋭く囚人を睨む。眉間に皺を寄せた所長は机上で手を組むと、絡めた五指の上に贅肉のついた顎を乗せる。そして、たっぷり間をおいてから口を開く。

「ここから逃げ出そうなど無謀な試みはしないことだ。ここ東京少年刑務所の敷地面積は30キロ平方メートル。その至る所に監視カメラがあり、二十四時間体制で看守が目を

光らせている。万一僥倖に恵まれて敷地外に出れたとしても、四方に広がっているのは涯てのない砂漠だ。諸君らは飢えと乾きに苛まれ、己の愚かさを呪いつつ緩慢に死んでゆくだろう」

脅迫というにはあまりに静かすぎる口調で、淡々と所長は言った。このビルに一歩足を踏み入れた時から勘付いていた。屋内外の至る所に設置された監視カメラの存在、猛禽のように囚人の動向を探る看守の目。今更念を押されずとも、脱走する気など起こりうるはずがない。

ここは悪名高い東京プリズン。

増加の一途を辿る少年犯罪に頭を痛めた政府が設立した、史上類を見ない敷地面積と収容人数を誇る少年刑務所。都内で犯罪を起こした二十歳未満の少年は、まず殆どと言っていいほど東京プリズンに送致される。窃盗などの軽犯罪から強盗殺人などの重罪に至るまで、東京プリズンにはあらゆる罪を犯した少年が収容され、懲役刑を終える時を待っている。

成人した囚人は郊外の刑務所に護送される手筈になっているが、東京プリズンで二十歳を迎えることができる可能性は極めて低い。東京プリズンはリンチやレイプが横行する無法地帯なのだ。たとえリンチで死者がでても明るみには出ず、闇から闇へと葬られるだけだ。

東京プリズンに収監された時点で戸籍は抹消されたに等しく、たとえ東京プリズンに送りこまれた囚人が不審な死を遂げたとしても記録に残ることはない。

『東京プリズンは地獄だ』

去り際の看守の言葉が蘇る。あれは比喩ではなく、事実である。

鍵屋崎　直は司直の手により、地獄へと送り込まれたのだ。

安田に先導され、奥へと廊下を進む。

天井には等間隔に蛍光灯が連なっている。ダイスケの後頭部に視線を固定しつま先を繰り出していると、前方に分厚い鉄扉が出現する。安田が立ち止まる。鉄扉の脇には液晶画面があった。液晶画面に手を翳す安田。画面が青白く発光し、重々しい音をたて鉄扉が割れる。

鉄扉に隔てられた廊下の向こう側には、暗渠をおもわせる湿った空間が広がっていた。コンクリート内話の壁と床、圧迫感のある低い天井。背後で自動的に鉄扉が閉まる。急激な環境の変化に戸惑いを隠せないダイスケとリュウホウが落ち着きなく目をさまよわす。

安田の視線を追い、振り返る。背後に控えていたのは看守

が一人。半透明の手袋をはめた件の看守は、サディスティックな笑みを浮かべ、整列した囚人一同を見渡す。
これから何が起きるのだろう。
不安げに顔を見合わせるダイスケとリュウホウ。僕にはこの後の展開がおおよそ予測できた。
目の端で安田を探る。安田は無表情に口を開き、命じた。
「服を脱げ」
「……な、」
ダイスケが絶句する。自然な反応だ。有無を言わせず服を脱げと命じられ、思春期の少年がはいそうですかと従うはずがない。リュウホウは縋るような目で安田を仰ぐ。だが、安田の顔色は変わらない。霜の下りた絶対零度の眼差しが、レンズ越しに注がれただけだ。
反発をおぼえた二人とは対照的に、僕は大人しく安田の言に従った。抵抗しても心証を悪くするだけで、僕にはなんの益もない。シャツの裾に手をかけ、一気に上着を脱ぐ。同じ手順で下着を脱ぐと、薄い胸板があらわになる。ズボンとトランクスに同時に手をかけ、踝までさげおろす。股間を外気に晒した僕を見て、あっけにとられたように口を開けたダイスケとリュウホウ。一糸纏わぬ姿になった僕は、局部を隠すことなく体の脇に手を垂らし、心静かに来るべき時を待つ。
安田は腕を組んだまま、表情一つ変えなかった。半透明の手袋を嵌めた看守は舌なめずりしている。発情した軟体動物のように下唇が貪欲に蠢き、生理的な嫌悪に肌が粟立つ。看守から目を逸らし、自身の生白い胸板を見下ろす。筋肉が発達してない、貧弱な肢体。
一体こんなもののどこに、目の前の男は興奮しているんだ。
「膝に手をつけ」
いまだ躊躇しているダイスケとリュウホウを半ば無視する形で看守が命じる。僕は大人しくそれに従う。膝頭に両手をつき、腰を落とす。全裸で前屈姿勢をとった僕の背後で、リュウホウとダイスケが激しく動揺しているのがわかる。
「はやくしろ！」
凄まじい剣幕で大喝され、リュウホウとダイスケが竦み上がる。湿った暗渠に大音声が響き、鼓膜が殷殷と痺れる。顔面蒼白のリュウホウと頬筋をこわばらせたダイスケは、背に腹は変えられぬと速攻で服を脱ぐ。服の裾に手をかけた瞬間、二人の目を逡巡の色が過ぎるが、看守の眼光に気圧され覚悟を決めたと見える。迷いを振り切るように一気にシャツを脱ぎ、自棄気味にズボンをさげおろしたダイスケの隣では、のろのろ手間どりながら服を脱いだリュウホウが頬を上気させて俯いていた。踝にひっかかったズボンを蹴散らし、丸めたシャツを後方へと投げ捨てたダイスケ

をおどおど窺い、裸の胸にシャツを抱きしめたまま看守の前へと進み出るリュウホウ。リュウホウに先を越されてなるものかと僕の右隣にやってきたダイスケは、ごくりと唾を呑んで看守の顔色を窺う。足を引きずるように僕の左隣にやってきたリュウホウは、哀れっぽく潤んだ目で安田に同情を乞う。

みっともない。

辟易した僕の耳朶を打ったのは、看守の苛立たしげな叱責。

「なにぼけっと突っ立ってんだ！　お前らもそいつを見習うんだよ！　今すぐ！」

要領の悪い囚人に業を煮やした看守がヒステリックに喚き、リュウホウとダイスケがたじろぐ。だが、二人に選択肢はない。看守の命令に従わなければどうなるか、ここに来るまでの道中で体に叩き込まれただろう。観念したダイスケは僕を真似、おずおずと腰を落とす。半泣きのリュウホウもダイスケを真似、尻を後方へと突き出す屈辱的な体勢をとる。

交尾に臨む雌犬のような体勢を囚人に強いた看守は、いやらしい薄笑いを浮かべてこちらへと接近してきた。囚人の自尊心を完膚なきまでに打ち砕き、体の細胞一つ一つにまで忠誠心を植え付ける為に。

背後で靴音が止む。耳を澄ます。荒い息遣い。唾を嚥下する音がやけに大きく生々しく響く。僕は視線を床に固定していた。決して背後は振り向かなかった。ひやり、肛門に冷たい手が触れる。肛門にもぐりこむ異物感、無遠慮に襞をかきわける指の感触。普段排泄にしか用を足してない器官に太い指を突っ込まれ、乾いた粘膜を爪でひっかかれる痛みにおもわず顔をしかめる。腸の内壁を緩急をつけて摩擦され、強烈な嘔吐巻がこみ上げてくる。永遠にも続くかに思えた苦痛な時間が終わった時、僕は我知らずため息を漏らしていた。肛門から指が引き抜かれる。体内に覚醒剤を隠してないか確かめるための直腸検査を終えた看守は、肩越しに安田を振り返り報告する。

「合格」

安田が頷く。よろしい。全身から力が抜けてゆく。こんなのはまだまだ序の口だと、シャツを着ながら漠然と思う。シャツの裾をおろして臍を隠し、かぶりを振る。ここは東京プリズン。入ったものは二度と出られない。

そう。ここは屠殺場なのだ。

最前まで僕の肛門をほじくり返していた看守が、嗜虐的な笑みを浮かべ、ダイスケへと歩を進める。視界の隅でダイスケの顔が醜く歪み、リュウホウの顔に絶望の帳が落ちる。彼らもようやく自分たちのおかれた状況を悟ったのだろう。愚かな。

直腸検査を終えた僕ら一行は暗渠を抜け、地下の廊下を通り、囚人の房がある隣の棟へと向かう。今度は僕が先頭を歩く。二番手がダイスケ、最後尾がリュウホウ。ダイスケもリュウホウも放心状態だった。よほど先刻の直腸検査がショックだったらしい。初対面の他人ーそれも男に肛門を犯されたのだ、無理もない。

僕はというと、まったくショックは受けていなかった。収監前に実施される直腸検査の予備知識はあったし、心構えもできていた。取り乱すほどのことでもない。

照度を落とした蛍光灯が点々と連なる天井の下、汚れた廊下を縦一列に歩く。暗渠に通される前に歩いた廊下とは違い、地下の廊下はお世辞にも清潔とはいえない。天井から滴った汚水が壁に奇怪な抽象画を描き出している様を横目にしつつ、足を繰り出す。僕の隣を歩いているのは安田だ。細身のスーツを一分の隙なく着こなした洗練された容姿は、もしこの場に異性がいたら十分魅力的に映るだろう。一筋の反乱も許さず撫で付けた髪の下の顔は、端正だがおおよそ表情というものがない。安田の平板な横顔を眺めていたら、ふと虚空で視線が絡まる。

安田の目はよく切れる剃刀のように鋭利で冷ややかだった。

「……なんですか？」

慎重に探りを入れる。安田は僕の身上を知っているはずだ。なぜ東京プリズンに収監されることになったのか、詳細な経緯を知っているはずだ。もし安田が僕の身上に興味をもっているなら……もっているのだとしても、何も答える気はない。僕が両親を刺殺した動機をあれやこれや他人に詮索され、あることないこと邪推されるのは不愉快極まりない。銀縁眼鏡のブリッジを押し上げ、ほんの少しばかり怪訝そうな目で僕を一瞥する安田。

「……いや。新聞で見た時も思ったのだが」

安田は何気なく言った。

「君は、鍵屋崎夫妻のどちらとも似てないな」

余計なお世話だ。

眼鏡越しに注がれる体温の低い視線から顔を背け、吐き捨てる。

「……似てない親子なんてどこにでもいますよ」

そう。どこにでもいる。そして僕自身、そのことを大いに喜んでいる。高圧的な父と自己中心的な母。戸籍上の両親どちらとも容姿の類似点がないことが、これまで僕の自尊心を支えてきたのだから。

「……たしかに」

安田が呟く。独り言に近い口吻で繰り返す。

「似てない親子など、どこにでもいるな」

納得したのか否か、安田はそれきり関心を喪失したように前に向き直る。僕は安田の隣に並び、黙々と足を繰り出す。この男、何を考えているのかわからない。注意深く安田の横顔を探る。線の細い、神経質そうな面立ち。品よく尖った顎とそれを支える首は、男にしておくのがもったいないほど白い。力仕事とは縁のない人生を送ってきた、ホワイトカラーの象徴たる繊細な五指。今の日本ではごく限られた特権階級しか身につける機会がないスーツは、一瞥しただけで外国のブランドに特注したものだとわかる。つま先から脳天まで札束で磨きぬかれたインテリ特有の選良意識を一挙手一投足に漂わせているが、時折その目を過ぎる光は霜の張った剃刀のように冷徹だ。

安田の横顔を仔細に観察している僕の背後、ダイスケを挟んだ列の最後尾でリュウホウがぶつぶつと呟いていた。東京プリズンに護送される道中も、リュウホウは意味ある言葉を発することなく、熱に浮かされたように不明瞭なうわ言を繰り返していた。長時間極度の緊張状態におかれ、精神に変調をきたしたのだろう。虚空に向けた目の焦点は拡散し、弛緩した唇の端には唾液の泡が付着している。

リュウホウの前を歩いているのはダイスケだ。直腸検査を終えて後、先刻までの饒舌ぶりが嘘のように暗い顔で押し黙っている。陰気に沈黙したリュウホウとダイスケを省みて、埒もない感慨に耽る。

こんなのはまだまだ序の口だ。

僕は地獄の入り口にも辿り着いていない。

革靴が廊下を叩く規則的な音が、コンクリート打ち放しの寒々しい廊下に反響する。先に進むにつれ、廊下は次第に不衛生な様相を呈してきた。天井に設置された蛍光灯は心許なく瞬き、壁には大小の亀裂が生じている。天井から滴り落ちた汚水が壁を伝い、ひたひたと床に触手を伸ばしている。つま先を過ぎる水の触手を目で追っているうちに、鼓膜に甲高い悲鳴が蘇る。

『お父さん！』

『お母さん！』

つま先を掠めた水流が赤く変色してゆく。あの時と同じ、床を流れた血と同じ鮮やかな赤に。

瞼の裏側に蘇るのは、恵の顔。極限まで目を剥き、恐怖と憎悪に駆られて僕を糾弾する妹の顔。恵の目に映った自分の顔を思い出すと、心臓が締め付けられるように痛む。

恵。今頃どうしているのだろう。

塀の外に唯一残してきた肉親の存在が、僕の心を呪縛する。外に未練などないが、恵だけは別だ。一度に家族を失った恵の心境とこれからを思うと、とても平静ではいられなくなる。恵の生みの親を葬り去ったのはこの僕だが、それは決して恵を哀しませるためじゃない。

むしろ僕は、恵のために……

「ここだ」

靴音が止んだ。鼓膜に浸透する静寂。目を上げる。廊下の行き止まりには巨大な鉄扉があった。天井から床まで達するその扉は黒光りする鋼鉄製で、十分な強度と耐性を兼ね備えていた。鉄扉の前で立ち止まった安田は、囚人たちの度胸を試すように一行を見下ろす。固唾を呑んで立ち竦むダイスケ、がくがくと震え出すリュウホウ。

僕は白昼夢の余韻に浸ったまま、ぼんやりと安田を仰ぐ。

「地獄の門を開けるぞ」

鉄扉の横、正方形の液晶画面へと手を翳す。

蜂の羽音に似た低い振動が鼓膜を震わせた次の刹那、鉄扉の中心に切れ目が生じる。左右に分かたれた鉄扉から奥へと歩を進める安田。先を譲り合うようにあとじさったリュウホウとダイスケを無視し、僕は安田に続く。背後で鉄扉が閉まる。

鉄扉に隔てられた廊下は、鉄扉の向こう側とは比較にならないほど荒廃していた。汚れた天井に吊られた蛍光灯の大半は割られ、残りの蛍光灯も寿命の尽きかけた蛍のように危うげに瞬いている。左右の壁一面を埋めているのは、卑猥なスラングや稚拙な落書き。壁の上方に設置された通風口から吐き出された生暖かい風が、湿ったシーツのように頬をなでる。

もう一つ変化があった。

廊下の左右に並んでいるのは、無個性な鉄扉の群れ。鉄扉の上部には矩形の窓があり、等間隔に鉄格子が嵌められていた。鉄扉の中央に鋲で固定されたプレートには、無表情な英数字で号数が記されている。

だが、廊下の変化より何より僕らの目を引いたのは、鉄格子の中からこちらを窺う無数の影ー無数の視線だ。敵愾心と警戒心を同量に含んだ剣呑な視線が、鉄格子の隙間から全身に注がれているのがわかる。

鉄格子に殺到した囚人たちを意図的に無視し、安田は平板な口調で言った。

「着いた」

安田は必要最低限のことしか喋らない、効率重視の男だ。安田が立ち止まったのは、廊下の端に位置した鉄扉の前。右の拳を掲げ、安田が機械的に扉をノックする。

沈黙。

「……留守にしているようだな」

安田の呟き。拍子抜けした僕を肩越しに振り返り、安田が言う。

「鍵屋崎、君の房はここだ。同室者は今留守にしているようだが、先に入っていてかまわない」

「はい」

逆らうという発想ははなからなかった。安田は従順な囚人に満足したらしく、踵を返して立ち去ってゆく。リュウホウとダイスケは別の房に案内されるらしい。僕の鼻先を一列に過ぎり、遠ざかってゆくダイスケとリュウホウ。別れの挨拶は交わさなかった。ただ、肘と肘が触れ合う距離にまで接近したダイスケが、極力音量を絞ってこう囁いたのは聞こえた。

『あばよ、親殺しのクソ野郎が』

押し殺した声には抑圧しがたい嫌悪と嗜虐心に酔った優越感が滲んでいた。僕に背を向けたダイスケの後方、小走りに列に続いたリュウホウが心細げにこちらを振り返る。僕は何も答えず、リュウホウとダイスケが廊下の角を曲がり隣の棟へと導かれてゆくのを漫然と見送っていた。

二人の後頭部が完全に視界から消失するのを待ち、手垢に汚れたノブを握る。鉄扉が軋み、内へと開く。薄闇に沈んだ房を見回し、慎重に慎重を期して歩を進める。

殺風景な部屋だ。

部屋の両側にしつらえられたパイプベッドのほかに、めぼしい家具調度は見当たらない。奥の壁に固定されているのは洗面台と鏡、床から一段高くなった所に設置されているのは便器か。これから長くを過ごす房を見回してみたが、心浮き立つものはなにもない。

当たり前だ。ここは牢獄なのだ。

我知らずため息を漏らす。自分の境遇を哀れむ気は毛頭起こらなかった。これは僕が選択した運命なのだ。第三者に責任転嫁することはできない。だが、こんな陰気な房で早すぎる余生を過ごすことを思うとさすがに気が滅入る。呆けたように房の真ん中に突っ立っていた僕だが、ふと部屋の隅に気配を感じ、暗闇に目を凝らす。

部屋の隅で蠢く人影。闇に溶けるように蹲ったその人物は、厳のような沈黙を守っている。安田が無人だと勘違いしたのも無理はない。僕も入室してからはじめて、先人の存在に気付いたのだ。目が暗闇に慣れるにつれ、闇に沈んだ先人の姿がおぼろげに浮かび上がる。床にじかに正座したその人物は、長親痩躯の若い男のようだ。恐ろしく姿勢がいい。定規で支えられたようにぴんと背筋が伸びている。こちらに背を向けているため容貌までは視認できないが、張

りつめた背からはなみなみならぬ気迫が伝わってきた。

なんなんだ一体。

僕が入ってきたことには当然気付いているだろう。廊下でのやりとりも当然聞こえていたはずだ。それなのに反応ひとつ示さないとは……。困惑した僕は、電源を探して視線をさまよわせる。とりあえず視界を明瞭にしなければ。あった。直上に吊られた豆電球を発見する。ずいぶん旧式の照明設備だ。半ば感心しつつ、頭上に手を伸ばし傘を捻った時だ。

「！」

風切り音が耳朶を叩く。

頬を掠めたのは、氷針めいた冷気と風圧。何が起こったのか瞬時に理解できず、バランスを崩して後方に尻餅をつく。床に尻餅をついた無様な体勢のまま、視線を上昇させる。目の前に立ち塞がっているのは、長身の影。不吉な陰影に隈取られた顔の輪郭の中、陰火めいた眼光が晧晧と輝いている。

なんて目だ。

口の中が渇く。喉が渇く。唾液すら沸いてこない。暗く剣呑な双眸ー抑えた殺気。僕の目の前に立ち塞がった人物の表情は、薄闇に沈んでいるため判別しがたい。だが、その人物が右手に携えているのは……一振りの木刀だ。その時になり、漸く僕は理解した。

僕の頬を掠めた凶器の正体は、これだ。この木刀だ。

木刀の切っ先が弧を描き、僕の鼻先へと突きつけられる。流れる水のようにゆったりとした、緩慢にもおもえるその動作には、しかし一分の隙もない。暗闇で相対した男は、木刀の切っ先を僕の顔の中心に据えたまま、微動だにしない。

「……何奴」

低くかすれた声がした。目の前の男の声だ。早まる動悸を抑え、答える。

「貴様の耳は節穴か」

内心の動揺を繕うように挑発的に吐き捨てた僕に、うろんげな気配が伝わってくる。相手が当惑しているのが手にとるようにわかる。尻を払い、起き上がる。暗闇で対峙した男に向け、続けざまに言い放つ。

「廊下であれだけ大きな声で話していたのに聞こえなかったというのか。もしそうなら今度聴力検査を受けることを勧める。僕は今度この房に収容されることになった者だ。

端的に言えば、そうー……君の同室者ということになる」
「同室者だと？」
相手が不審感も露わに反駁する。僕は頷く。沈黙。やがて、木刀の切っ先が下ろされる。
パチン。
軽い音がした。狭い室内に明りが満ちる。眩く発光する豆電球の下に立っていたのは、長身痩躯の若い男だ。意志的な眉の下、一重瞼の双眸が瞬きもせず僕を凝視している。肉の薄い鼻梁と口角の下がった唇、尖った顎。髪の色は今の日本では珍しいことに、ぬばたまの黒。烏の濡れ羽色という形容が相応しい光沢のある黒髪を無造作に一つに結い、禁欲的な修行僧のように引き締まった顔に無精髭を散らしている。
男は感情の読めない目でじっと僕を見た。そして。
「……名を名乗れ」
なんだと？
耳を疑った。要領を得ない反応を返した僕に、男は辛抱強く繰り返す。
「名を名乗れ、少年」
下唇を舐め、時間を稼ぐ。逡巡は三秒に満たなかった。次に顔をあげた時、僕の舌は主の意思に関係なく動いていた。
「鍵屋崎……ナオだ」
「鍵屋崎ナオか。……変わった名前だな」
言葉とは裏腹に、男は殆ど感情を覗かせることがなかった。興味が失せたように僕から視線を逸らすと、その場に胡坐をかく。組んだ膝の上に木刀を置き、片手を鍔に、片手を刃の背においてためつすがめつする。
自分から聞いておいて癇に障る男だ。これだから馬鹿は手におえない。
「貴様の名前はなんだ」
「貴様」という二人称を恣意的に選択したのは僕なりの不快感の表明だが、鈍感な男には伝わらなかったらしい。懐からとりだした手ぬぐいで丹念に木刀を磨きつつ、興味なさそうに男が答える。
「名など忘れた。……他の者からはサムライと呼ばれている」
サムライ。
「……そのままだな」
「ああ。芸のない二つ名だが、存外気に入っている」
あきれ返った僕の皮肉にも、サムライは律儀に答える。膝に乗せた木刀を満足げに見下ろすサムライ。先ほどまで四肢に漲らせていた殺気は霧散し、切れ長の目は柔和な光を湛えている。再び木刀を向けられることはないだろうと安堵した僕の耳朶を、サムライのうろんげな声が叩く。

「どうした？」
「なに？」
サムライが僕の横顔を怪訝そうに凝視している。
「何を突っ立っている。適当に座ることを勧める」
妙に堅苦しい物言いで指図され、僕は憮然として室内に視線を走らせる。サムライのように直に床に座るのは抵抗があった。一見したところ、この房はお世辞にも衛生的とは言いがたい。少なからず潔癖症の傾向がある僕は、少しでも清潔な場所を探して首を巡らす。結果、パイプベッドのマットレスは床より幾分マシであると判断した。室内を横切り、無人のマットレスに尻を乗せる。固いマットレスが尻の下で弾む。
再びの沈黙。
膝の上で手を組んだ僕は、壁に沿って視線を一巡させる。明りの下で改めて見てみると、殺風景な内装が際立つ。錆びたパイプベッドは廃品寸前の代物、よく見ればマットレスも染みだらけで、破れた部位から無残にも綿がはみだしている。ベッドの上に掛けられた毛布はひどく毛羽立っており、寝心地は悪そうだ。壁にも天井にも、至る所に不気味な染みが浮き出している。
「……居心地のよさそうな部屋じゃないか」
口の端に自嘲の笑みを浮かべた僕を、目の端でちらりと一瞥するサムライ。木刀を拭う手はそのままに、平板な声で問いを投げる。
「皮肉か？」
「本気で言ってるわけがないだろう」
喉の奥で卑屈な笑い声を泡立て、吐き捨てる。なんたるザマだ、なんてブザマなんだ鍵屋崎直。かつては輝かしい未来を約束された身が、今や悪名高い刑務所の薄暗い房で長い長い余生を過ごすことになろうとは。
なんという運命の皮肉。
今の僕に示された選択肢はただひとつ。気が遠くなるほど長い刑期を、刑務所の暗闇で終えるだけ。
僕の行く手に待ち受けているのは、一筋の光もさしこまない暗澹たる未来。
東京プリズンに収容されたら最後、生きて釈放される可能性は限りなく無に近い。僕はこんな汚い房で一生を終えるのか。一生をこんな……
「じきに慣れる」
堂堂巡りする思考を遮ったのは、鼓膜に響いた低い声。虚ろな目を下方に向ける。床に胡坐をかいたサムライが、目だけ動かしてこちらを見上げる。底光りする猛禽の目だ。
「……初日は辛いだろうが、一週間もすればここでの生活に慣れる。慣れざるをえない。それまでの辛抱だ」

「……哀れんでくれるのか。見かけによらず優しいな」
冷笑的な態度でサムライを揶揄する。サムライを名乗る男は床に正座したまま、スッと一重の双眸を細めた。彫刻刀で彫ったような切れ長の造作の眦が、峻厳な光を忍ばせてこちらを一瞥する。
「……哀れんでいるわけではない。これは忠告だ。従うかどうかはそちらの勝手だ」

サムライの口調は著しく抑揚を欠いていた。
その淡白な物言いから推量するに、僕の身を案じているわけでもないらしい。床に膝を折って正座し、背筋をぴんと伸ばし、切腹に挑む武士のように厳粛な面持ちで木刀と向き合っている。丹念に磨かれた木刀は飴色の艶を帯び、サムライの掌中にしっくりと納まっている。
サムライの横顔を観察する。鋭い陰影に縁取られた顔の輪郭、そげた頬と尖ったおとがい。酷薄な印象を与える薄い唇は、最前から一文字に引き結ばれて沈黙したままだ。
妙な男だ。
暗闇で対峙した時の得体の知れない威圧感は、今は感じられない。凪のように深沈と鎮まった光は柔和な光を宿し、慈しむように木刀を磨く手の動きには一切の無駄がなく、もはや職人芸の域に達している。寡黙なサムライは無駄口を好まないらしく、甚だお節介な忠告とやらを発した後は己の掌中の身に全神経を傾注している。
新参者と必要以上に馴れ合う気はなさそうだ。
心中深く安堵する。人付き合いを苦手とする僕にとって、初対面にもかかわらず友人面して馴れ馴れしく話しかけてくる他者の存在は苦痛にほかならない。無知で無能な愚者の発言は例外なく癇に障る、知能指数が劣る人間と喋っても得られるのは疲労感のみ、時間を浪費するだけで益はない。目の前の男は異論を挟む余地のない変わり者だが、ダイスケとは違いちゃんとそこらへんを理解しているようだ。
サムライをじっくり観察する余裕が出てきた僕は、この風変わりな男に純粋な興味を覚え戯れに質問を投げる。
「君はこの刑務所に入って何年になる？」
サムライは木刀を磨く手を休めず、記憶の襞を探るように目を細めた。
「……三年だ」
「何歳だ」
「今年で十八歳になる」
「十八歳？」
驚いた。おもわず反駁した僕にも格別反応を示さず、サムライは淡々と続ける。
「老けて見えただろう」

図星だ。無精髭の散った細面はどう贔屓目に見ても十代には見えない。ここが未成年の受刑者を収監する少年刑務所であることを鑑みればサムライが十代であることは疑うべくもない事実なのだが、それでも僕は一抹の疑念を捨てきれない。脂じみた黒髪が額に被さり、やつれた面に影を落としているせいだろうか。頬のそげた生気に乏しい顔は、骸を積んだ戦場から帰還した歴戦の武者のように凄惨な年輪を刻んでいた。

「……お前も人を殺したのか」

下唇を舐め、慎重に問う。サムライの手が止まる。ネジを巻かれた人形のようにぎこちなく首をあげ、尖ったおとがいを巡らし、振り返る。サムライの目には底知れない空洞が穿たれていた。その目に墨汁を一滴垂らしたように波紋が浮かび、理性の光が点る。

「……お前もか」

理性の光を宿した瞬かない目が、僕の動向を探るように鋭く光っている。曇った豆電球の下、薄暗い照明におぼろに浮かび上がるのは、垢染みた囚人服を着た姿勢のいい男。サムライと距離をとり、対岸のマットレスに浅く腰掛けた僕は、氷針めいた視線の圧力に屈して首を折る。額に落ちた前髪の下、目尻に醜い皺が寄るのが顔の筋肉の動きでわかる。

今の僕はきっと、醜く歪んだ笑みを浮かべていることだろう。

「……ああ。そうだ。奇遇だな」

組んだ膝の上に手をおき、胸にこみあげてきた苦汁を吐き捨てる。自虐的な台詞に触発されたか、両親を殺した時の映像がフラッシュバックする。ごぼりと泡音をたてて血を吐き出した口腔の粘膜、恐怖と苦痛に歪んだ断末魔の顔。最期の力を振り絞って伸ばした五指で虚空をかきむしり、後ろ向きに倒れてゆく両親の姿。

視界を染める一面の赤、これは……血だ。

両親を刺したときの感触が、まざまざと手に蘇る。ナイフの切っ先が肉を抉るおぞましい感触。弾性のある筋肉組織をひきちぎり、脂肪の層を裂き、柄の近くまで深々と胸に埋まったナイフ。傷口から迸った鮮血がしとどに手首を濡らし、じわじわと袖に染みてゆくー……

「ああ」

日も浅い殺人の記憶を反芻していた僕は、鼓膜を打った声にはっとして顔を上げる。悪循環に陥った思考を遮ったのは、蒸した茶葉のように渋いサムライの声。床に正座したサムライは、死期を間近に控えた老人のように表情の削げ落ちた顔を虚空に向けていた。目に宿るのは飽和した光、視線の先にあるのは点々とシミが浮き出た壁。

殺風景な壁に視線を固定し、サムライが口を開く。
「……まったく、奇遇だな」
刹那、サムライの表情に変化が訪れた。目を伏せたサムライの顔を過ぎったのは、複雑な色。後悔、自責、悔恨、諦観……平板な声の底でさざなみを立てているのは、混沌と渦巻くさまざまな感情。薄く含み笑ったサムライの顔は、救い難い悲哀を帯びておのれの過去に思いを馳せているかに見えた。

あっけにとられた。

ほんの一瞬だけ鉄板の仮面がめくれ、サムライの素顔がかいま見えた気がした。コイツ、こんな人間らしい表情もできるんじゃないか。頭の片隅で感心した僕は、意識的に唇を綻ばせる。

おもしろい。
君はおもしろい男だ、サムライ。

唇の端を歪め、サムライへと視線を投げる。瞬き一つ、常と変わらぬ無表情を取り戻したサムライは手首を捻り、磨き終えた木刀を左右に傾げて検分している。磨き抜かれた木刀に映ったおのれの顔に、満足げに頷く。この男は変わっている。ただの変人ではない。もっと深いものを内に秘めている。知的好奇心を刺激された僕は、この先待ち受けている単調な刑務所生活の中で、殆ど唯一ともいえる娯楽を発見したことに狂喜していた。
サムライは格好の観察対象だ。見ていて飽きない。
人間観察は物心ついた時分からの僕の趣味であり、自己を防衛するために培った習性だった。僕の知的好奇心を充足させてくれるのはダイスケのような短絡的な馬鹿でも、食物連鎖の最底辺に位置するリュウホウのような惰弱な人間でもなく、サムライのように僕の理解を超え共感を拒絶する者ー……僕と全く異なる生育歴を持ち、全く相容れない価値観を基盤とした存在でなければ物足りない。
一人ほくそえんでいた僕に水をさしたのは、衣擦れの音。釣られるように視線を前方に向ける。木刀をベッドの下にしまい、膝を払って立ち上がるサムライ。垢染みた囚人服を羽織っているというのに、その洗練された所作には一種の風格さえ漂っている。
サムライは天井を仰ぐと、小声で呟いた。
「くる」
なにが？
答えはすぐにわかった。次の瞬間、廊下にけたたましいベ

ルが鳴り響く。廊下の左右に並んだドアが弾けるような勢いで開け放たれ、囚人たちが歓声とともに溢れ出す。何事だ一体。鉄扉上部の格子窓へと顔を寄せた僕は、ふと気配を感じ横を向く。いつのまにか隣に来ていたサムライが、囚人たちで溢れ返った廊下を気のない目で眺めて付け足す。

「夕餉の刻限だ」

なるほど。さっきのベルは夕食の開始を告げるものだったのだ。理解した途端、空腹を覚えて腹に手をやる。半日かけて未舗装の砂利道をトラックの荷台に揺られてきたのだ。その間与えられたのはミネラルウォーターと味けない乾パンだけ。半日前にとった食事はとっくに消化されている。

「……食堂に案内する」

僕の顔色を見て何か察したのか、サムライがノブを捻る。蝶番が軋み、鉄扉が開く。サムライに続いて廊下にでた僕は、白と黒の洪水に取り巻かれて眩暈を覚える。白と黒の洪水と錯覚したのは、二桁を超す囚人たちが身に付けた格子縞のシャツだった。怒涛の勢いで押し寄せた囚人に揉まれ、鼻先を塞いだ囚人の背に危うく窒息しかけながら、向こうに見え隠れするサムライの後頭部を追って洪水を抜ける。岩場を避けて泳ぐ魚のように、囚人たちを回避するサムライの足取りは澱みない。たいして苦もなく雑踏を抜けると、背後で息を切らした僕を悠然と振り返る。

「この先だ」

言葉少なく、サムライが廊下の奥を指さす。サムライにわざわざ教えられなくても、囚人たち全員が同じ方向を目指していることから容易に推理できる。プライドを挫かれた僕は歩調を速めてサムライに追いつくと、彼の方を見もせずに吐き捨てる。

「まるで動物園だな」

周囲を取り巻く囚人たちに目を馳せ、致死量の毒を含んだ声で揶揄する。どいつもこいつも下卑た面をして、野太い濁声でさかんに叫び交わしている。品性のカケラもない。低脳の集団に囲まれていると息が詰まる。おもわず顔をしかめた僕の鼓膜を、場違いに澄んだボーイソプラノが叩く。

「あれっ、新人さん？」

鈴を振るような朗らかな響きを備えたその声は、変声期を迎える前の少年のものに相違なかった。反射的に振り向く。僕の右手に立っていたのは、150センチあるかないかの小柄な少年。既存の囚人服が余ってしまうほど手足は細く、汚れたスニーカーをひっかけた踝は砂場で遊ぶ女の子のように華奢だ。スニーカーを踏んづけた踵から、体の線に沿って視線を上昇させる。貧弱な体躯を囚人服の中で泳がせていた少年は、折れそうに細い首の上に小さな顎を乗せ、にこにこと微笑んでいた。額に被さった赤毛の下、愛嬌たっ

ぷりの翠の目が好奇心旺盛に輝いている。銀幕を飾るに相応しい稚気と愛嬌を兼ね備えた少年は、天真爛漫な笑顔で僕を覗きこむ。

じいっ。

執拗に顔を凝視され、居心地が悪い。気圧されたように腰を引いた僕を無視して、図々しくも間合いに踏みこんでくる少年。鼻の頭が接するほどの至近距離に童顔を突き出し、少年が訊く。

「……その眼鏡、伊達？」

は？

予期せぬ質問に狼狽した僕を前に、ご機嫌な猫のように喉を鳴らす少年。からかわれたのか？　不愉快だ。顔の前でさかんに手を振り、邪険に少年を追いやる。たたらを踏んで後退した少年を一瞥、眼鏡のブリッジを中指で押し上げる。

「……伊達ではない。自慢ではないが僕の視力は０．03だ」

「わるっ」

赤毛の少年がずっとんきょうに叫ぶ。アメリカのホームドラマにでてくる子役のようなオーバーリアクションに辟易する。不躾に僕の顔を覗き込んでいた少年は、何事か腑に落ちたようにサムライに目をやると、人懐こい童顔にいやらしい笑みを広げる。

「はあーん、なるほど。つまり、そういうことか」

「？」

何を言ってるんだ、この低脳は。そういうことってどういうことだ。当惑した僕をよそに、耳年増の中年女のように一人合点した少年はふんふんと頷いている。

「サムライにもやっと春が訪れたってわけね」

なにか誤解しているようだ。反駁しようと口を開きかけた僕を遮り、少年が続ける。

「メガネくん、サムライをよろしくね。そいつちょっと無口で変わってるけど、いざって時は頼りになる男だからさ。酒もクスリもやんないし、潔癖すぎて面白みには欠けるけど」

腰の後ろで手を組み、したり顔で頷く少年。満面にあどけない笑みを湛えた童顔は、大人の歓心を買う術に長けた子役のように徹頭徹尾打算的ですらある。唖然と立ち尽くす僕の前で、少年はさっと身を翻す。肩越しに振り返り、気さくに手を振ったその顔には悪戯っぽい微笑が浮かんでいた。

「じゃあね。君たちもはやく行かないと席とられちゃうよ」
軽い足音を残し、駆けてゆく少年。小さな背が雑踏に呑まれるのを見送り、傍らのサムライを仰ぐ。サムライの唇から吐息が漏れる。少年の姿が視界から消失するのを待ち、歩を再開するサムライ。サムライの横を歩きつつ、尋ねる。
「……今のはなんだ」
「……リョウだ。それ以上のことについてはおいおいわかる」
サムライの横顔には色濃く疲労が滲んでおり、重ねて問うのはためらわれた。短いやりとりの間に食堂に着いた。廊下の壁が途切れ、ひらけた空間が出現する。三階まで吹き抜けの巨大な空間を囲うように手摺が巡り、それぞれの階にテーブルと長椅子が配置されている。テーブルは八割方先客で占められており、遅れをとった囚人たちがトレイを持ったまま舌打ちしている。食堂上空では罵声と怒声が交錯し、食器とフォークが触れ合う金属質の音が鼓膜をひっかく。サムライに先導され、カウンターの前に長蛇の列を作った囚人たちの最後尾に並ぶ。
「食事は一日二食、朝餉は朝六時、夕餉は夜六時だ。献立は……知りたいか？」
「……遠慮しておく」
ため息。刑務所の献立など知りたくもない。前を向いたサムライが感じ入ったように首肯する。
「賢明だ」
緩慢に列が進む。僕は食堂に視線を巡らした。一日の労働を終え、腹を空かせた囚人たちが一同に会した食堂は活気があった。否、ありすぎたといったほうがいい。今も四方八方のテーブルで囚人同士の小競り合いが起こり、ひっくり返ったトレイが床を打つ甲高い音が間断なく響き渡る。食事もそこそこに、テーブルの上で上下逆転しながら取っ組み合っているのは喧嘩っ早い囚人たちだろう。
なんてせわしない食事風景だろうか。遠目に眺めていても食欲が失せる。
目を瞑る。思い出すのは家族の食卓。だだっ広いテーブルの隅、ちょこんと腰掛けているのは幼い妹ー恵。不器用にフォークを操ってグラタンを食べている、いたいけなその姿。

恵は今、どうしているのだろう。

両親が存命だった頃から、家族揃って食卓を囲むことはまれだった。殆ど皆無だったと断言してもいい。今、一人になった恵はどうしているのだろう。一人で食事を食べているのだろうか。一人で広い食卓の隅に座り、所在なさげに

椅子から足を垂らしているのだろうか。

「きたぞ」

サムライに促され、前を向く。カウンターの前に並んだ囚人たちがすり足で移動し、漸く僕らの順番が巡ってきた。隅に重ねられたトレイを手に取り、アルミの食器を置いてゆく。

カウンターの内側で給仕しているのは、清潔な白衣に身を包んだ無表情な看守が十人余りこの少人数で倍近い数の囚人たちを相手にしているのだ、道理で要領が悪いわけだ。納得した僕の皿の上でお玉を振り、マッシュポテトの塊をこそげ落とす看守。ワカメの浮いた味噌汁を一すくい、あとは目玉の潰れた目玉焼きだけ。なんとも貧相な献立だが文句をいえる立場にない囚人たちは、むすっと押し黙ってカウンターを後にする。

トレイを胸の前で掲げた僕はキョロキョロと混雑した食堂を見回す。飢えた囚人たちが行儀作法など全く無視し、犬のように飯にがっついている。アルミの皿を抱えこみ音をたてて味噌汁を啜り、味気ないマッシュポテトを咀嚼して飲み下す。ものを咀嚼する旺盛な音に空腹を刺激され、口の中に唾液が沸く。

ぼんやりと食堂を見渡していた僕の隣に並んだサムライが、顎をしゃくる。

「あちらだ。ついてこい」

とっつきにくい見た目に反し世話焼きなサムライは、地理に不慣れな僕のために食堂を案内してくれるつもりらしい。サムライの好意に有難く甘えることにする。罵声とフォークが喧しく飛び交う中、周囲の喧騒をものともせずにサムライは歩を進める。サムライの背に促されるがまま、あてもなく足を前後させていた僕の視界の端を、眩い光が射る。

反射的に目を細め、光が射した方角を見る。

等間隔に配置された巨大なテーブルの一隅に、青年が座っている。金と茶の中間色の髪をうなじで括ったその青年は、一見して混血児だとわかる外見的特徴を有していた。肌の色は東南アジア系の出自を示す滑らかな褐色、しなやかに伸びた手足とすらりとした体躯が中性的な雰囲気を醸している。

顔だちは出来過ぎなほど整っていた。形よく尖った顎を備えた顔には、涼しげな切れ長の目と日本人離れして高い鼻がバランス良く納まっている。

あえて荒を探すなら皮肉げな角度に吊った唇が人によっては不愉快な印象をもたらすだろうが、面食いの異性を前に

すればそれすら野卑な魅力に転化できるだろうことは想像に難くない。何より目を引くのは、両の耳朶に連ねたピアスの数だ。右耳に5個、左耳に6個……計11個。
僕の目を射た光の正体は、青年が耳朶に嵌めたピアスの反射光だった。
僕の視線を感じたのか、青年がふいに振り向く。おもむろに手を挙げ、席を立つ青年。ぎょっとした僕の鼓膜に、音吐朗々と滑舌のよい声が響く。
「こっちだ、サムライ！」
理解した。青年が認めたのは僕ではなく、背後にのっそりと佇んでいるひょろ高い影ーサムライだったのだ。サムライと青年は面識があるらしく、サムライはとくに警戒するでもなく青年のもとへと歩み寄る。仕方なく、後に続く。一つ結いの青年はにやにや笑いながら僕とサムライを出迎えた。
片手で頬杖つき、片手でフォークを弄びながら初対面の青年が言う。
「空いてるぜ。座れよ」
空いてる？
青年の前後左右は余す所なく先客で埋まっている。空席などどこにもないではないか。困惑した僕をよそに、一つ結いの青年がぐるりと視線を巡らす。刹那、劇的な変化が生じた。青年と目が合った囚人たちが食べかけのトレイを持ち、そそくさとテーブルから引き揚げ始めたではないか。我先にと競うように席を後にした囚人たちを愉快げに見送り、頬杖ついたまま青年が笑う。
「な、空いたろ」
良心の呵責など一片もない爽やかな笑顔。あきれる。サムライはとくに咎める様子もなく、青年の対面に腰掛ける。僕は躊躇した。
「お前も座れ、カギヤザキ」
テーブルの向こう側からサムライに声をかけられても、僕は所在なげに立ち尽くしたまま、次の行動を迷っていた。この場合はサムライの隣に腰掛けるべきだろうか。しかし、いくら同房者とはいえ馴れ合うのは煩わしい。サムライの隣に座った場合、僕がコミュニケーションを図ろうとしていると誤解され万が一にも一方的な友情など抱かれてしまったら困る。とはいえ、この茶髪の青年の隣に腰掛けるのも気が引ける。
一瞥で周囲の席を占めていた囚人たちを退かせた事実から察するに、彼は優男の見かけによらない刑務所内での実力者なのだ。そんな危険人物の隣に腰掛けて、万一トラブル

に巻き込まれでもしたらー……

堂堂巡りする思考を遮ったのは、風変わりな名字を小耳に挟んだ青年だった。

「へえ、お前カギヤザキっての？　へんな名前」

「失敬だな」

思ったことを口に出す。青年が目をしばたたいた。次の瞬間、はじけるように笑い出す。前出の会話のどこに笑える要素があったのか理解できない。椅子に反り返り、大口開けて笑い出した青年のもとへ、性急な足音が近づいてくる。

「お前の笑い声を聞くと飯が不味くなる」

足音は僕の隣で止んだ。

そちらに目をやると、傍らに小柄な少年が立っていた。癖の強い黒髪の下で輝いているのは、人慣れぬ野良猫をおもわせて警戒心の強い双眸。小造りに整った顔はまだ少年の域を脱しておらず、若干のあどけなさを残している。成長期の途上にあるのだろう骨格は華奢で、囚人服の袖から覗いた手首には間接の尖りが目立っていた。肌は黄色人種のそれだ。見た目は日本人と変わらないが、言葉の端々に覗く独特のイントネーションから察するに、出自を辿れば台湾系に行き着くのだろう。

黒髪の少年はけたけた笑い転げる青年を、ついで、その背後に立ち尽くす僕をうろんげに一瞥する。

「座んねーの？」

少年が顎をしゃくったのは、こともあろうに青年の隣の席だった。逡巡しなかったといえば嘘になるが、これ以上空腹に耐えられそうになかった。言われるがまま、今しがた先客を追い払ったばかりの席に腰を落ち着ける。椅子を引き、目の前にトレイを置く。笑い声が止む。ようやく笑いの発作が終息した青年は高い天井を仰いで深呼吸すると、僕の頭越しに件の少年へと声をかける。

「おそかったじゃねーか、ロン。ナンパでもされてたのか？」

「箸とフォーク、刺すならどっちがいい？」

黒髪の少年が乱暴に椅子を引き、僕の隣に腰掛ける。期せずして初対面の囚人二人に挟まれる形となった僕は、なんとも居心地が悪い。正面へと目を転じれば、サムライはそしらぬ顔で味噌汁を啜っていた。箸を握った瞬間に僕の存在など忘れ去ったのだろう。僕は努めて無表情にフォークを繰り、味の薄いマッシュポテトを口に運ぶ。必要以上に時間をかけてマッシュポテトを咀嚼していた僕は、横顔に注がれる不躾な視線に辟易し、うんざりとため息をつく。

カチャン。

食器とフォークを置いて振り向く。最前から僕の横顔を断

りもなく凝視していた主は、右隣に腰掛けた一つ結いの青年だった。線の細い端整な顔立ちの中、かっきりと弧を描いた眉の下で色素の薄い茶色の目が性悪なチェシャ猫のように笑っている。目を弓なりに反らせた青年は悪びれた様子など全くなく、にやにや笑いながら僕の顔を覗きこんでくる。

……不愉快だ。

一体この男はなにを考えているんだ。思考が読めない。男を無視して食事を再開しようとしたが、横顔に注がれるなぶるような視線に嫌気がさし、ため息とともに食器をおろす。これは一言あるべきだろう。表情を改め、青年の方へと向き直る。とうに食事を終えた青年は、僕と目が合うと愉快そうに片眉を動かした。器用な芸当をしてみせた青年に特に感情を表に出すでもなく、淡々と言い放つ。

「吐き気がするほど図々しい男だな」

片手に頬を委ねた青年が虚を衝かれたような顔をする。咳払いし、ふたたび顔を上げる。要領を得ない顔をした青年と面と向かい、続ける。

「食事が終わったのなら可及的速やかにこの場を立ち去り、ほかの者に席を譲れ。君に注視されている僕は非常に不愉快だ。食欲も失せる」

僕は冷静に事実を指摘したまでだ。言い終えた後、周囲が水を打ったように静まり返っていることに気付き、違和感をおぼえる。食器とフォークが奏でる金属音が止み、椅子の脚が床を擦る乾いた音も全くしない。何事かと辺りを見回す。僕と同じテーブルに居合わせた囚人たちが固唾を呑んでこちらを凝視している。

否、正確には僕ではなくその背後の人物を。

一身に注視を浴びていたのは、リラックスした姿勢で僕の隣に腰掛けた青年だった。左手で頬杖つき、空いた右手でフォークを弄ぶ青年。その唇には、薄く笑みが浮かんでいた。青年の掌中でフォークが旋回し、銀の弧を描いてまた手元へと戻ってくる。

異変は唐突だった。

ガタン。椅子から腰を浮かした青年が、残像すら見えぬ速度で僕の額にフォークの先端を擬したのだ。僕の額にフォークを突きつけた青年はゆったりと微笑んでいる。魅惑的と評してもいいだろう、透明度の高い微笑だ。硝子玉めいて色素の薄い瞳に映っているのは、瞬きすら忘れて硬直した僕の顔。フォークの先端は僕の額、紙一重の虚空に固定されている。もう少しフォークを進めれば、尖った先端が額の皮膚に食いこむだろうことは非を見るより明らかだ。

場が緊迫した。
空気が凍結する。

テーブルを囲んだ囚人たちは、握ったフォークと手にした食器の存在も忘れてこちらを見つめている。彼らの顔に浮かんでいるのは紛れもない怯えー恐怖。彼らは一体何に怯えているのだろう。

答えは明白だ。彼らはこの得体の知れない、優雅に微笑した青年に怯えているのだ。

ぎくしゃくと首を巡らし、青年と視線を絡める。
吸い込まれそうなほどに透明度の高い茶色の瞳に魅入られそうになる。だが、彼の手に握られているのは凶器のフォークだ。フォークで人を殺せるとも思えないが、目の前の男には警戒を促す何かがある。
時が停滞したような沈黙を破ったのは、荒々しい舌打ちだった。
舌打ちがした方角に目を向ける。左隣に座っていた黒髪の少年が、フォーク片手に僕を睨んでいるのだ。行儀悪くも椅子に片膝立てた少年は手にしたフォークを一転させると、凄みを効かせた三白眼で僕をーその背後の人物を威圧する。
「いい加減にしろよレイジ。新人をからかって何が面白い？」
おさまりの悪い黒髪の下、軽蔑しきったように目を細めた少年の仲裁に、青年は恐れ入ったようにフォークをおろす。額から外れたフォークに安堵したのも束の間、青年がどこか安定を欠いた笑い声をあげる。
「ジョーダンだってロン。マイケル・ジョーダン」
「だれだそれ」
「昔いたバスケットの選手。知らねえ？」
「知らねーよそんなの。何十年前の話してんだ」
ほとほとあきれたように首を振った少年は、椅子から腰を浮かせた不自然な体勢で凝固している僕をチラリと見ると、マッシュポテトをつつきながら面倒くさそうに告げる。
「お前もとっとと食っちまえよ。トロトロしてっともってかれるぞ」
「もってかれる？」
少年が顎をしゃくる。通路を五本隔てた遠方のテーブルに一際柄の悪い集団が陣取っている。数にして十人前後だろうか、いずれ劣らぬ凶悪な人相をした少年たちの上座を占領しているのは、頭抜けて体格のいい男である。おそらく彼が首領各なのだろう。無個性な囚人服に包まれていてもよく鍛えられた厚い胸板と固く隆起した上腕二頭筋は一目

瞭然だ。気のせいか、彼は腕組したまま微動だにせず、眼光鋭くこちらを見つめている。

「凱だ」

マッシュポテトの山を突き崩しながら、少年が気のない素振りで吐き捨てる。フォークに乗せたマッシュポテトを口に運びつつ、疲れたようにかぶりを振る。

「レイジを目の敵にしてなにかとつっかかってくる年中脳味噌不足気味欲求不満気味のインポ野郎ども。お前も俺らと一緒にいるとこ見られると、奴らのターゲットにされるんじゃねえか」

少年の目が凱たちと同じテーブルの端へと向けられる。テーブルの隅、肩身が狭そうに縮こまっている人影には見覚えがある。覇気に欠ける貧弱な背中と世界の不幸を一身に背負っているかのような撫で肩は忘れもしない、僕とともにここに護送されてきたリュウホウである。喧騒から疎外されたテーブルの隅にひっそりと身を寄せたリュウホウは、至極のろのろした動作で終始伏し目がちにマッシュポテトをついばんでいた。一口ずつ咀嚼して飲み下す、延延とその繰り返し。そんなリュウホウのもとに足音荒く歩み寄ってきたのは、荒んだ雰囲気を漂わせた囚人数人。素早く連携してリュウホウを取り囲むと、抗議する暇を与えずにマッシュポテトを盛った食器を掠め去る。最も、気弱なリュウホウのことだ。もう少し反射神経に恵まれていたとしても、腕っ節の強い囚人たちから食器を死守できたか怪しい。現にリュウホウはにやにや笑いを顔にはりつかせた囚人たちを見上げ無力に手をつかねているだけで、食器を奪回しようという素振りは一向に見せない。

途方に暮れたリュウホウの姿を注視しているのが忍びなくなり目を伏せた僕の耳に、フォークの先端が食器を打つ甲高い音が響く。

「ところで新人、自己紹介がまだだったよな。俺はレイジ。よろしく」

瓢々と名乗りを上げたのは、先刻、僕にフォークを突きつけたのと同一人物である。明るい茶髪を襟足で一括りにした青年は、好青年の最大公約数のように爽やかに笑う。一拍ほど迷ったが、無視すると後々禍根を残しそうなので仕方なく口を開く。

「僕は鍵屋崎直だ。今日東京プリズンにきたばかりで、そこの彼……サムライと同房になった」

先刻から一言も発さず、周囲の騒音にも無関心に味噌汁を啜っていたサムライを顎で示す。レイジと名乗った青年はトレイをどかして卓上に片肘乗せるや、図々しくも僕の方へと身を乗り出してくる。

「ナオちゃんか、かわいい名前。女みたい」

「野郎口説いてどうすんだよ」
黒髪の少年が皮肉げに笑う。僕の肩越しに少年の顔を覗き込んだレイジは、さも心外そうに眉根を寄せる。
「かわいければ男でも女でも関係ナイね、博愛主義者の俺には」
「単に無節操な変態がよく言うぜ」
「ひょっとして嫉妬か？」
「てめえの腐れ目ん玉にフォーク刺して死ねよレイジ」
どうやらレイジと名乗るこの青年と黒髪の少年は、よほど親しい間柄にあるようだ。両者憎まれ口を叩き合ってはいるが、一触即発という危うい雰囲気は微塵もない。レイジは愉快そうに口の端をつりあげ、黒髪の少年を促す。
「お前も自己紹介しろよ」
「ロン」
自己紹介というにはあまりに素っ気ない口ぶりで、少年は名を名乗った。ロン。龍と書くのだろうか。すみやかに食事を終えたロンは、空のトレイを持って席を立つ。去り際、僕の背後で立ち止まり、
「ひとつ忠告してやる。お前の隣に座ってるその男には気をつけろ。いつ寝込みを襲われても知らねーからな。朝起きた時に下半身になにも穿いてなかった、なんて目にはあいたくねーだろ」
「……あったのか？」
「なに？」
眉間に縦皺を刻んだ少年を仰ぎ、素朴な疑問を音声化する。
「今述べた内容を以前体験したことがあるのか」
刹那、タガが外れた笑い声が炸裂する。鼓膜を叩いた笑い声の主は、右隣に座るレイジだった。ロンの顔が恥辱に歪むのを見逃さなかった。目を過ぎった激情の余波を鉄面皮の下に覆い隠し、あっさり踵を返すロン。僕の背後を大股に横切ったロンは、レイジの椅子の脚に容赦なく蹴りを入れる。脚に加わった衝撃は椅子を転倒させるのに十分な代物だった。バランスを崩した椅子が派手な音をたてて横転し、馬鹿笑いしてたレイジの体が逆しまに床へと投げ出される。床に尻餅をついたレイジは「いててててて……」と泣き笑いの表情でうめいている。満員御礼の食堂で醜態を晒したレイジを鼻で笑い、すたすたとカウンターへ向かうロン。
「……図星か」
さしたる感慨もなく呟く。僕の予想は当たったわけだ。ロンが去った後、レイジの笑い声が急速に萎み、食堂にはフォークとアルミ皿が奏でる喧騒が舞い戻る。強打した尻をさすりつつ大義そうに椅子を起こしたレイジは、雑踏に紛れたロンの背を見送りかぶりを振る。

「まったく、照れ屋さんなんだから」
「照れているわけではないだろう」
味噌汁を啜りながら冷静に指摘してやる。レイジがこちらを向き、先を促すように眉を跳ね上げる。アルミの椀をトレイにおき、音をたてぬようフォークを端に寄せる。空の食器を眺めて満腹感に浸りつつ、続ける。
「彼はきっと君の存在が煩わしいんだ」
レイジが世にも情けない顔をする。滑稽きわまりないほど意気消沈したレイジがテーブルに顔をうつぶせ、「……見かけ以上にきっつい性格だな、お前」と嘆じる。テーブルに突っ伏したレイジ、その後頭部を冷めた目で見下ろし、トレイを抱えて席を立つ。食事を終えればゴキブリが這いずり回る不衛生な食堂になどもう用はない。一抹の未練なく踵を返し、カウンターにトレイを返却しようとした僕の背を間延びした声が引き止める。
「お前、カギヤザキってゆーんだよな」
「……そうだが」
動揺を糊塗するために殊更ゆっくりと振り向く。肩越しに振り向いたレイジは、記憶野を漁るように目を右上方に向けて黙考している。レイジの眉間に寄った皺を眺め、沈黙を守る。その間も心臓の拍動は不規則なリズムを刻み、腋の下には粘液質の汗が滲み出している。
僕の名字を聞いて何か勘付いたのか？
拍子抜けもはなはだしく、レイジはにっこりと微笑んだ。
「んじゃ、これからお前のことキーストアって呼ぶわ」
「……は？」
間の抜けた声で反駁する。今何と言った？　鍵屋崎＝鍵屋＝キーストアか。非常にわかりやすい、安易かつ短絡的な連想だ。トレイを捧げ持った僕は、疑い深く念を押す。
「……用件はそれだけか？」
「それだけ」
「本当にそれだけか？」
「なんだよ、それだけだよ」
レイジが鼻白む。目前の対象に興味を喪失したレイジは、椅子の脚を鳴らして正面を向くと、背後に突っ立ったままの僕にぞんざいに手を振る。
「もう行っていいぜ」
釈然とせぬまま歩行を再開する。カウンターにトレイを返却し食堂を後にする間際、いまだテーブルに頬杖ついたままのレイジを振り返る。フォークを口にくわえたレイジは、茫洋とした目を虚空に向けて物思いに耽っている。顔立ちが出来過ぎなほど整っているためだろうか、たったそれだ

けの動作が絵筆を銜えて画架と向き合う前衛画家のように様になっていた。

妙な男だ。またひとつ観察対象が増えた。

おもわぬ収穫に嬉々としつつ、人で賑わう廊下へ出る。食事の後は就寝時刻まで自由時間と決まっている。だが、僕の足は一日の労働を終えてもなお余力を温存した囚人たちがたむろする娯楽室の前を素通りし、自身に割り当てられた房へと向かっていた。

元来た廊下を逆に辿り、無事房へと帰還する。鉄扉を押し開け、房内へと足を踏み入れる。中は薄暗かった。明かりもつけずに未使用の左のベッドへと倒れこむ。固いマットレスに受け止められた体が軽く弾み、今日一日の出来事が映写機で上映される古いフィルムのようにカタカタと脳裏を巡る。

瞼を閉じ、セピアがかったフィルムの記録を反芻する。百八十度見渡す限りに広がる茫漠たる砂漠、砂利道を疾駆するジープの不景気なエンジン音、不毛の荒野のど真ん中に忽然と現れた有刺鉄線と夕空を圧する巨大な威容の建造物。空調の整ったビルの屋内で出会った安田と、僕らを品定めするような視線を向けてきた横柄な所長。屈辱的な直腸検査、そして……

サムライ。

不思議な男だ。口数は少なく、喜怒哀楽にも乏しい。感情表現は下手に見えるが、その実、時折目を過ぎる殺気走った光には常人の背筋を凍らせるものがある。

暗闇で木刀を突きつけられたとき、まだ実際にはサムライの顔を知る前から、僕は彼に非常な興味を持っていた。これからこの房で二人きりの生活が始まる。自分の生活圏内に他人がいると思うと息が詰まるが、いるのかいないのかわからないほど気配を抑制しているサムライが同居人ならば一日のサイクルを乱されることもなさそうだ。

先刻の会話を思い出す。

『お前も人を殺したのか』

『お前もか。奇遇だな』

あの時、サムライは笑った。剃刀のように鋭い笑みを閃かせたのだ。

サムライも人を殺したことがある。
サムライはだれを殺したのだろう。

それは、血の繋がった肉親なのだろうか。それとも全く関係のない、通りすがりの赤の他人なのだろうか。

僕が殺したのは血の繋がらない両親だった。

そこは白い部屋だ。
無菌室をおもわせる清潔な壁に四囲を塞がれた、現実感に乏しい殺風景な部屋。漂白された空間の中央には質素な椅子が一脚しつらえられていた。他には家具調度も見当たらず、一面を静寂に支配されていた。壁に防音処置でも施されているのだろうか、聴覚が麻痺したかと危ぶむほどの異常な静けさが心を乱す。不規則に脈打つ心臓をシャツの上から掴み、漠然とした不安にかられて顎を巡らす。
右から左へ、左から右へ。
ぐるりと一周した視界が再び正面を向くと同時に、異変を悟る。最前までからだった椅子に人が腰掛けている。こちらに背を向け、丸みをおびた頬を強張らせた人影には見覚えがある。肩を経て流れるほつれたおさげ、申し訳なさそうに傾いだ背中と行儀よくそろえた膝。あどけない横顔は痛々しいほど白く、小さく尖った顎は硝子箱に眠るセルロイドの人形のように華奢で愛らしい。
少女は白い服を着ていた。フリルも飾りもない素っ気ないデザインの服は、実用一点張りの入院着を思わせた。脇に穴が開き、裾がゆるやかに広がった服は通気性にこそ優れていたが、小柄な少女には余裕がありすぎた。踝まですっぽり隠れる長さの裾が微かに揺れ、少女が半身を捻り、こちらを向く。

一連の動作はひどく緩慢だった。

肩越しに振り向いた少女は膜が張ったように虚ろな目をしていた。黒く潤んだ目がいたいけな小鹿のように庇護欲を刺激し、ぼくは我知らず足を踏み出した。磁力に引かれるように、少女へと接近する。少女は半身を捻った不自然な体勢のまま、微動だにせず僕の接近を待っていた。億劫そうに瞬きを繰り返す動作は、もとより表情に乏しい少女に白痴じみて浮世離れした印象を付与した。ふっくらとした手を膝の上で揃え、少女は感情の窺えない目で僕を凝視していた。硝子玉を彷彿とさせる硬質の目に、僕の顔が映る。ぎょっとした。
少女の瞳に映し出されたのは異形の化け物だった。胴体と

癒着した四肢は皮膚が粘液状に溶解し指の先端から肩までがぐずぐずに溶け崩れ、体の輪郭はもはや原型を留めていない。目鼻は汚泥の中に沈没して痕跡すら残さず、顔の下半分を占めた口とおぼしき空洞だけがぽっかりと虚無を溜めている。貪欲に開かれた口腔には歯はおろか舌も声帯もなく、肥大したナマコの腹をおもわせる赤い粘膜がぬめぬめと輝いているだけだ。僕ははっとして自分の体を見下ろした。どこにも変化はなかった。指は十本ともちゃんとある。皮膚は黄色人種のそれの特徴を有したまま、乾いて肉の上に張り付いている。

僕は困惑した。そして、戦慄の真実を思い知る。

これが僕か。

この怪物が少女の目から見た僕か。

少女の瞳の中で怪物がうろたえ、粘液状の皮膚を蠢動させてあとじさる。おのれの醜悪な姿に気圧され、よろけるように後退した怪物を前に、少女はおもむろに口を開く。

『それがあなたの本性よ、鍵屋崎　直』

託宣を下す巫女のように、少女は気高く言い放った。相変わらず表情は欠落していたが、その目に浮かんでいるのは紛れもない侮蔑と嫌悪の色。僕は首を振った。違うと訴えようとした。しかし、声が出ない。喉をかきむしり、叫ぶ。聞こえない。なにも聞こえない。鼓膜に干渉してくる静寂が理性を麻痺させ、冷静が信条の僕を恐慌状態に突き落とす。混乱した僕を哀れみの篭った目で一瞥し、少女は毅然と顎を反らした。

『あなたの本性は見るもおぞましい怪物……。わたしとはちがう、わたしたちとはちがう。そう、生まれた時から。いえ、生まれる前からあなたは人と違っていた。生まれる前からあなたは異常だった。異常な生まれ方をしたあなたが平常な人生を歩めるはずがないじゃない』

冷え冷えした声が脳裏に浸透するに従い、体重を支えていた足が頼りなげに萎えてゆく。腰砕けにその場に座り込んだ僕は、縋るような眼で上方を仰ぐ。頭上に影がさす。衣擦れの音すらさせずに立ち上がった少女が、妖精のような軽さで床を踏みしめ、僕の前へと佇立したのだ。

それは、まったく唐突だった。

少女がにっこりと微笑んだ。無表情から一転、年相応に無邪気な笑顔で僕を見下ろしている。右頬に生じたえくぼも愛くるしく唇を綻ばせ、僕へと手をさしのべる。少女の手が僕の背に回された。脱力した上体が傾ぎ、少女の腹部へ

顔を埋める格好となる。少女に抱き寄せられた僕は、羊水の海を漂う胎児のような安堵感に漬かっていた。子供特有の体温の高い、柔らかい腹に鼻面を擦りつけ、その腰にしがみつく。少女は抵抗する素振りも見せず、微笑んで僕を受け入れた。

この瞬間を待っていた。ずっとずっと。

床にしゃがみこんだまま、下腹部にしがみつく格好となった僕を優しく抱擁し、少女はそっと囁いた。

『やっぱり』

湿った吐息が耳朶をくすぐり、薄目を開ける。目の前で少女が笑っている。愉快そうに目を細めた、どこか小悪魔めいた嗜虐的な笑顔。

『あなたは異常者だわ』

微笑んだまま、少女が言う。くすくすとたのしそうにせせら笑う。僕は硬直した。少女は銀鈴の声で笑っていた。刷毛で耳朶をなぶられるような歯痒い戦慄。当惑した僕をすくい上げるような上目遣いで観察し、言う。

『「妹」に欲情するなんて恥ずかしくないの、おにいちゃん？』

ふっと少女が離れた。僕の腕の中から身を捩って逃れた少女は、背で後ろ手を組むと、踊るような足取りで二、三歩後退した。その間もさもたのしそうに忍び笑いを漏らし、くるくるとおさげを振り回している。

『鍵屋崎　直は異常者。妹にしか性的魅力を感じない近親相姦の変態。こんな人がおにいちゃんだなんて、メグミ、恥ずかしくて表を歩けない』

メグミ。

少女が舌に乗せた名に体が反応する。びくりと肩を強張らせた僕は、鼻梁にずり落ちた眼鏡越しに少女を仰ぐ。メグミー恵。目の前の少女の名だ。小さなおとがいに人さし指を添え、鈴を振るような声で笑い続ける少女に全身が総毛立つ。僕は彼女を知っている。この世で一番大事な人間―いまや、唯一人の肉親となったかけがえのない妹。床にへたりこんだ僕は、恵を捕らえようと手を伸ばす。入院着の裾を掴もうと指を閉じたが、ウスバカゲロウの翅のように薄い生地は抵抗なく五指をすり抜けてしまう。身軽に身をかわした恵を追い、膝を叱咤して立ち上がる。恵はくすくすと笑っていた。天使のように愛らしい微笑の内から滲み出るのは、単なる好奇心で蝉の羽を毟る幼児と同じ無邪気な悪意だ。

『人殺し』
僕の手を逃れた恵が、言う。笑いながら、言う。
『おにいちゃんは人殺し。お父さんとお母さんを殺して私を独り占めしようとした。シスターコンプレックスの性的異常者。そんな人が身内にいるなんて、メグミ恥ずかしい』

ちがう。
ちがうんだ恵。

反論は喉につかえて出てこない。舌が喉を塞ぎ、絶叫の奔流を辛うじて塞き止めている。恵の顔から拭い去ったように笑みがかき消え、瞳の温度が氷点下まで下がる。恵は表情を欠落させた目で、言葉に詰まった僕を凝視した。
『全部あんたのせいだ』
憎悪に濁った声で吐き捨てる恵。あどけない顔を陰惨に隈取っているのは抑圧しがたい嫌悪と憤怒だ。恵は別人のように低い声で、容赦なく断罪の斧を振り下ろす。
『あんたが私の家族をめちゃくちゃにした。あんたが私の将来をめちゃくちゃにした。返してよ。わたしのお父さんとお母さんを返して。ねえ、返して』
恵が片手を突き出し、大股に詰め寄ってくる。恵の手首が上下するのにあわせ、せわしげにおさげが跳ねる。僕は絶句し、成す統べなくその場に立ち尽くした。棒立ちになった僕のもとへと歩み寄った恵は大きく深呼吸し、ひたと僕を見据える。
透明度の高い、黒い光沢のある瞳。
『わたしの人生を返せ……近親相姦のクソ野郎』

＋

「！」
夢だ。
すべては夢だ。
目を開けた時、真っ先に視界にとびこんできたのは複数の影だ。ベッドを取り囲んだ五・六体の影が互いに顔を見合わせ、好奇心をむき出しにして僕を見下ろしている。自分のおかれた状況を把握するまで瞬き三回ほどの時間を要した。浅く短い眠りを妨げたのは、今、僕のベッドを取り囲んでいる影たちの立てた物音のようだ。白い悪夢から一転真っ暗な現実へと帰還した僕は、闇に目を凝らして影たちの動向を探る。
目が暗順応を起こすにつれ、闇に沈んだ影たちの容貌がおぼろげに浮上する。ぼんやりと闇から分離した集団の顔には、いずれも見覚えがある。先刻食堂でリュウホウから皿

を取り上げた、柄の悪い少年たちの一団だ。ロンから警戒を促されたばかりだというのに全く油断していた。
僕の傍ら、枕に程近い位置に立ちはだかっているのは、頭抜けて体格のいい青年だ。
凱。
ロンはそう呼んでいた。詳細な年齢は分からないが、頬骨の張ったいかつい顔と二つに割れた頑丈な顎が威圧感を与える。窮屈そうな囚人服の下に隠されているのは分厚い筋肉で鎧われた、重ねた鉄板のように固い胸板だ。口元に下品な笑みを溜めた凱は両手をポケットに突っ込み、にやにやと僕の寝姿を眺めていた。
「用件があるなら手短に頼む」
僕は疲れていた。愚鈍で粗野な連中の相手をしてやる体力は残っていない。明日から始まる強制労働に備えて、一分一秒でも長く睡眠を貪りたいのだ。
凱のこめかみがぴくりと動く。どうやら……反感を買ってしまったようだ。
「用件？　あるぜ、もちろん」
ポケットに手をもぐらせたまま凱が顎をしゃくる。それが合図だった。
ベッドを包囲した少年たちが一斉に僕へと飛びかかり、マットレスに四肢を縫い止める。素晴らしい反応速度だ。頭は鈍いが反射神経はそう悪くないらしいと評価を改めた僕の耳に押し殺した声が侵入する。
「－さっき、レイジたちと一緒にいたな」
「……ああ」
「なにを話してたんだ？」
「知能指数90にも満たないくだらない会話だ。わざわざ細部まで説明したくない」
凱の涙袋が痙攣し、圧縮された怒気が全身から放散される。拳を握り締め、凱が続ける。
「新入りのくせにケツふってレイジに取り入ろうってハラか。判断を誤ったな、お前」
凱が汚い歯を見せてせせら笑う。僕は眉根を寄せた。察するに、凱は僕とレイジの関係について誤解してるらしい。やれやれ、これだからは馬鹿は手に負えない。
「この僕が判断を誤るなど地球が周回軌道を脱線する確率よりさらに低い。何か勘違いしてるようだが、僕はレイジの友人になったつもりもこれからなるつもりもない。たまたま食堂で席が隣り合わせただけで、あちらも僕のことを友人とは認識してないだろう」
妙なあだ名はつけられたが。一呼吸おき、続ける。

「低脳どもの暇潰しに付き合われるのは御免だ。このまま寝かせてくれないか」
できうる限り穏便に申し出たつもりだが、裏目にでた。全く、度し難い連中だ。猿へと退化した大脳で人語を理解できるわけがなかったのだ。

凱の顔が憎々しげに歪み、ねじれた唇から気炎が吐き出される。
「寝かせてやるよ」
みぞおちに衝撃。
解剖学的な正確さで鳩尾に打ち込まれた拳に背が撓う。息が詰まり、一時的な酸欠状態に陥る。目の前が赤く点滅、危機を知らせる赤信号が瞼の裏に乱れ咲き酸っぱい胃液とともに猛烈な嘔吐感がせりあがる。
はげしく咳き込む僕の鼓膜を下卑た哄笑が叩く。ベッドを取り巻いた少年たちが品のない大口を開け、大袈裟に笑い転げている。盛大に唾を飛ばし、甲高く平手を叩き、上体を仰け反らせて笑う少年たちを眇めた目で一瞥、視線を上方に滑らす。
凱の顔が目と鼻の先にある。
「これくらいじゃ寝られねえってか？　軟弱な見た目に反して打たれ強いじゃねえか」

分厚い唇を捲り上げてせせら笑う凱。黄ばんだ歯が唾液にぬめり、いやらしく濡れ輝いている。腹を庇って身を丸めた僕の襟首を掴み、凱は耳元でささやいた。
「つくづくツイてねえな、お前。寝ちまったほうがラクなのによ」
凱が意図していることは察しがついた。恐らく、これから僕は意識を失ったほうが幸せだったとしみじみ感じ入るような目にあわされるのだろう。一分の隙なくベッドを包囲した、複数の少年たちによって。
馬鹿の行動は短絡的で読みやすい。
ひりひり痛むみぞおちを庇い、上体を起こす。　すぐさま二人がかりで肩を押さえ込まれ、マットレスに背中を叩きつけられる。ベッドの周囲に居並んだ少年たちを見回し、僕は吐息に諦念を滲ませて吐き捨てた。
「事前に忠告しておきたいことがある」
「なんだあ？」
凱の眉根がぴくりと動く。僕は仰臥した姿勢で眼鏡のブリッジを押し上げ、言う。

「僕は不感症だ」

あぜんとした沈黙。

あっけにとられた顔がベッドのぐるりに円を描いている。雁首並べた少年たちの間抜け面を心ゆくまで観察しつつ、僕は抑揚に乏しい口調で続けた。

「短絡的思考を旨とする君たちのことだ、これから行おうとしていることも察しがつく。わざわざ就寝中に忍び込んでおきながらすぐさま行動を起こさなかったのは、僕の反応が見たかったからだろう。

……以上のように仮定して推論を導き出せば、ことは単純なリンチじゃない。殴る蹴るの暴行目的で房に侵入したのなら、徒手空拳の標的をベッドに押さえ込んでおく必要はどこにもない。どのみち多勢に無勢、腕力で劣る僕が君らにかなうわけがないからな。従って……」

眼鏡のポジションを正し、視線を往復させる。ベッドを取り囲んだ少年たちは例に漏れずぽかんとした顔をしている。先刻まで威勢のよかった凱でさえ思考停止状態の空白の表情で僕を見下ろしていた。

「君たちがこれから行おうとしていることは明々白々。強姦だろう」

不均衡な沈黙。

僕のベッドを取り囲んだ少年たちは毒気を抜かれたようにその場に立ち尽くしていた。最前まで疑問符を浮かべていた不審顔から拭い去ったように表情が消え、沸々と怒りが湧き上がってくる。モルモットに指を噛まれた科学者のように嫌悪と怒りの入り混じった目が僕へと注がれ、粘着質な視線が肌を這いまわる。

僕は嘆息し、四肢から力を抜いた。

「ご覧のとおり僕は手も足も出ない状態だ。強姦したければするがいい。ただ、僕の反応を期待しているなら残念ながらご期待に添えそうもないな」

僕はいい加減うんざりしていた。こうなったら一刻も早く面倒ごとを済ませて欲しい。今の僕は明日から始まる強制労働に備えて一分一秒でも長く睡眠をとり、気力と体力を充電しなければならないのだ。

性欲を持て余した低脳どもの玩具になるのは正直ぞっとしないが、恐怖よりは生理的嫌悪の方が先に立っている。同性と性交した経験はないし排泄以外の目的に肛門を使用したこともないが、女性がいない東京プリズンではこれが日常なのだろう。

僕らを護送してきた看守も言ってたではないか、東京プリズンはリンチとレイプが横行するこの世の地獄だと。

ソドムの刑務所で一日目に受ける洗礼としては、まあ妥当な部類だろう。僕はざっとベットの周りを見回し、暗闇に同化した人数を把握した。一、二、三……しめて六人。またずいぶんとご団体でやってきたものだ。

これから順番に六人に輪姦されるとして、はたして僕の体がもつだろうか？　確証はない。最初の三人位で満足してくれればいいのだが、枕元に待機しているのはいずれも窮屈な刑務所暮らしで性欲を持て余している凶暴な少年たちなのだ。

最悪一人二回ずつとして計十二回……辟易する。

「……なめやがって」

獰猛な唸り声に目を向ける。とても未成年とは思えない頑強な体躯の凱が、体の脇に垂らした拳を握り締め、射殺さんばかりの目つきで僕を睨んでいた。

「！」

風切る音が耳朶を掠めたと思った次の瞬間、僕は身を二つに折って苦悶にうめいた。鉛の重量を伴い腹の中心部へと叩き込まれた拳の威力は絶大で、ひしゃげた胃袋から酸っぱい胃液が逆流してきた。さっき食べたワカメの味噌汁の味が口内を満たし、胃袋ごと吐き戻しそうな嘔吐感に襲われて目が眩む。

苦悶に身を捩る僕の頭上にのっそりと影がさす。歪んだ視界を一点に凝らしてみれば、鼻先に凱の顔が浮かんでいた。攻撃的に尖った顎には男性ホルモン分泌過多のためか剛毛のヒゲが生えていた。

凱の顎先の毛穴に焦点を絞っていた僕の襟首が無造作に掴まれる。首が絞まり、危うく窒息しかけた僕の胴へと凱が跨る。

凱の顔は怒りに上気していた。

「早速レイジの悪影響が出やがったな。飯の最中になに話してたんだか知らねえが、大方まわりに敵を作る方法でも習ってたんだろ？」

否定できない。

妙に的を射た因縁をふっかけながら、手荒く僕の襟首を揺する。力任せに襟首を締め上げられ気道が圧迫される。顔を充血させた僕が酸欠状態に陥る寸前で襟首を解放した凱が、悪意滴る揶揄を耳孔へと注ぎ込む。

「ケツ振る相手をまちがえたな、メガネ。レイジの周りにいる奴は全員ムショでも浮いてる変わり者のキチガイ揃いさ。野郎の飴玉しゃぶるのが三度の飯より好きなリョウ、台湾と中国の半半でどっちのグループからもハブられてる無愛想でかわいげねえロン、それにお前の同居人……」

一呼吸おき、続ける。

「サムライだ」

「？」

生理的な涙でかすんだ目を凱の顔へと凝らす。凱は笑っていた。楽しくて楽しくて仕方ないという嗜虐心に酔った陰湿な笑み。問答無用許可も得ず、凱の手が僕のシャツの内

側へともぐりこむ。
抵抗する気は毛頭ないと前述したが、脇腹を這いまわる手の汗で湿った感触に体が拒絶反応を起こす。鳥肌。全身の毛穴が縮む感覚を味わうのはぞっとしないが、これから行われる行為でさらに極限の忍耐を強いられるだろうことは想像にかたくない。僕を組み敷いた凱は強張った下肢を片膝で割り、片手で愛撫を続けながらもう一方の手をズボンの内側へと滑り込ます。
「っ、」
腰が引けた。
ズボンの内側で蠢く他人の手を意識すると、えもいわれぬ違和感を覚える。確かに僕は不感症だ。そう多く性交渉の経験があるわけではないが、どのセックスの場合でも絶頂に達したことはなく、また、理性が押し流されるような快感を感じたこともなかった。
今もそうだ。じかに太腿へとおかれた凱の手が膝の表裏をまさぐり、敏感な部位をさがして五指を独立して動かすも、僕が感じているのは他人に自分の体を好きにされているという嫌悪感と腰のあたりに沈殿した鈍い疲労感のみ。まあ、愛撫に反応してよがり声でもあげたりしたらかえってこの低脳を喜ばせるだけなので、それはそれでいい。
僕の太腿をしつこくなで擦りながら、凱は熱に浮かされたような口調で続ける。
「おめえは今日来たばかりで知らねえだろうが、アイツはある意味レイジ以上の危険人物だぜ」
アイツ。サムライ。性急に太腿をしごかれ、苦痛に顔をしかめた僕の脳裏にサムライの横顔が浮かぶ。初対面の時、暗闇に沈んだ房の中央で座していた孤独な男の横顔が。
「サムライがなんでぶちこまれたか知ってるか？」
質問。無言。けたけたと下品な声で凱が笑う。
「殺しだよ」
それだけなら別に驚かなかった。
サムライが殺人を犯して東京プリズンに収監されたことは本人の口から聞き及んでいたし、未成年による殺人事件が大々的にマスコミに取り上げられたのはもう半世紀も前の話だ。
今の時世、十八歳未満の未成年が人を殺したからといって目の色変えて騒ぎ立てるほどの価値はない。交通事故より少し珍しい位の割と頻繁に起こる現象、よくある事件に過ぎないのだ。僕が東京プリズンに送り込まれることになった主たる罪状も、両親に対する尊属殺人と所長に転送された書類には記載されているだろう。
だが、続く言葉には目を剥いた。
「サムライは東北で有名な剣術道場の跡取り息子だったん

だが、ある日突然とち狂って、それまで共に修行してきた同胞十三人を伝家の宝刀で斬り殺した」

「！」

凱はぐっと声を潜めた。極力トーンを落とした、怪談でも語るかのようなおどろおどろしい口調。

「サムライが惨殺した十三人の中には、自分に剣を伝授した実の父親も入っていた」

おそろしげに口にした凱の目に一抹の翳りが射したのを僕は見逃さなかった。

間違いない、凱は怯えていた。

今ここにはいない房の主に、僕の同居人に、あの……サムライに。

「……動機はなんだ？」

口を開き、からからに喉が渇いていたことに気付く。動機。動機が知りたい。自分の父親を含む十三人もの人間を片端から殺害したからには、そこには明確な動機が介在したはずだ。僕の知るサムライは礼儀正しい物腰と含蓄深い口調が印象的な、明鏡止水の四字熟語を体現したかのような男なのだ。

あの物静かな男が、何故そんな大それたことをしでかしたんだ？　脳裏に疑問符が増殖してゆく。僕を脅すために凱が嘘をついているという可能性も考慮したが、その疑惑を自ずから否定するが如く凱の顔は真剣だった。

目を見ればわかる。

凱はどこまでも真剣にサムライに怯えていた。